

飛驒市山城シンポジウム

# 姉小路氏城館跡の実像に迫る

## 発表要旨



小島城跡想像復元イラスト（画：香川元太郎 藩修：中井均）

2023年10月29日  
飛驒市教育委員会

# 飛驒市山城シンポジウム「姉小路氏城館跡の実像に迫る」

**場所** 飛驒市文化交流センター スピリットガーデンホール（古川町若宮2丁目1-63）

**日時** 2023年10月29日（日） 9：30～15：30

**主催** 飛驒市教育委員会

## プログラム

09：30～09：40 オープニング

09：40～10：10 【基調講演】史跡の保存と活用について

渋谷啓一氏（文化庁主任文化財調査官）

10：10～10：45 全国の山城と姉小路氏城館跡について

中井均氏（滋賀県立大学名誉教授）

10：45～11：20 戦国飛驒国の武家とその支配－姉小路氏・三木氏・金森氏をめぐって－

仁木宏氏（大阪公立大学教授）

11：20～11：55 発掘調査と石垣から見た姉小路氏城館跡について

内堀信雄氏（岐阜市ぎふ魅力推進部文化財保護課主幹）

13：00～13：35 繩張りから見た姉小路氏城館跡について

加藤理文氏（日本城郭協会理事）

13：35～14：10 姉小路氏城館跡とその周辺の空間構造

山村亜希氏（京都大学大学院教授）

14：30～15：20 討論「姉小路氏城館跡の実像に迫る」

司会：三好清超（飛驒市教育委員会）

15：20～15：30 クロージング

## 目次

史跡の保存と活用について	渋谷啓一（1）
全国の山城と姉小路氏城館跡について	中井 均（3）
戦国時代の飛驒国の武家とその支配－姉小路氏・三木氏・金森氏をめぐって～	仁木 宏（11）
飛驒地方戦国期城郭石垣の様相－姉小路氏城館跡を中心に－	内堀信雄（15）
縩張りから見た姉小路氏城館跡について	加藤理文（23）
姉小路氏城館跡とその周辺の空間構造	山村亜希（33）

## 例言

- 本書は、飛驒市が文化庁の国庫補助を受けて2023年10月29日（日）に実施する、飛驒市山城シンポジウム「姉小路氏城館跡の実像に迫る」の発表要旨集である。
- 本書の編集は、飛驒市教育委員会事務局文化振興課の三好清超が担当した。
- シンポジウムの開催にあたり講師の方々から多大なるご協力をえた。深く感謝の意を表したい。

飛驒市山城シンポジウム『姉小路氏城館跡の実像に迫る』  
令和 5 年 10 月 29 日（日）@飛驒市文化交流センター

史跡の保存と活用について

文化庁文化財第二課 渋谷 啓一

はじめに 一史跡とは？

- 記念物=我が国にとって記念となる国土に刻まれたもの

\*文化財保護法第 2 条の四

「この法律で「文化財」とは、次に掲げるものをいう。

（中略）

四 貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの、・・・（以下「記念物」という。）」

\*文化財保護法第 109 条

「文部科学大臣は、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物（以下「史跡名勝天然記念物」と総称する。）に指定することができる。

2 文部科学大臣は、前項の規定により指定された史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを特別史跡、特別名勝又は特別天然記念物（以下「特別史跡名勝天然記念物」と総称する。）に指定することができる。」

\*特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準

（昭和 26 年 5 月 10 日 文化財保護委員会告示）

「史跡（前略）我が国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、かつ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において学術上価値のあるもの」

「特別史跡 史跡のうち学術上の価値が特に高く、我が国文化の象徴たるもの」

1 保存と保護

（1）史跡保護のあゆみ

明治 7 年（1874 年）「古墳発見ノ節届出方」（太政官達）

明治 13 年（1880 年）「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」（宮内省達）

明治 32 年（1899 年）「遺失物法」

「学術技芸若ハ考古ノ資料トナルヘキ埋蔵物取扱ニ關スル件」

（内務省訓令）

明治 44 年（1911 年）「史蹟及び天然記念物保存ニ關スル建議」

● 大正 8 年（1919 年）**史蹟名勝天然記念物保存法**→2019 年は記念物制度創設 100 年

● 昭和 25 年（1950 年）**文化財保護法**

※文化財保護法第 1 条（保護=保存+活用）

「この法律は、文化財を**保存**し、且つ、その**活用**を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。」

## (2) 史跡保護の進め方

発見・調査・研究（価値づけ）→ 史跡指定 → 整備 → 保存・活用

## 2 史跡の指定状況と近年の傾向

- ・史跡の指定件数=1,888 件（令和 5 年 4 月現在）
- ・特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準の 9 類型

- 一 貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡
- 二 都城跡、国郡庁跡、城跡、官公庁、戦跡その他政治に関する遺跡
- 三 社寺の跡又は旧境内その他祭祀信仰に関する遺跡
- 四 学校、研究施設、文化施設その他教育・学術・文化に関する遺跡
- 五 医療・福祉施設、生活関連施設その他社会・生活に関する遺跡
- 六 交通・通信施設、治山・治水施設、生産施設その他経済・生産活動に関する遺跡
- 七 墓及び碑
- 八 旧宅、園池その他特に由緒のある地域の類
- 九 外国及び外国人に関する遺跡

- ・指定状況；中世以降の遺跡を保護へ

## 3 史跡の保存と活用について

### (1) 地域、自治体にとって史跡とは？

※史跡は、どのような「場」となりうるか？

- 守り伝えていく文化財
- I. 地域を対象としたまちづくりの場の提供
- II. 来訪者を対象とした観光の場の提供
- III. 住民を対象とした場の提供
- IV. 技術者を対象とした場の提供

多様な側面＝各々の史跡、自治体の状況によって、答えは多様

→各々の史跡の『保存活用計画』策定は、その思考を具現化。

### (2) 史跡の活用にむけて

○活用＝保護・保存する一つの方法

- ・周知、普及することで保護する
- ・史跡保存のための管理費等の費用を稼ぐ

○考えの前提＝「保護・保存されるべき遺跡である」

◎保護されるものとは？

地下遺構・景観やバッファーゾーン・コンテクスト（文脈）

○保存し、活用するために、整備をする。

整備＝どう保護するのか、どう活用するのかが、反映される事業。

※遺跡一つ一つに個性がある。整備にも個性が出てくるはず

◎個性ある史跡を作っていく

## 全国の山城と姉小路氏城館跡について

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

### ◆はじめに

- ・飛騨の山城跡に登る ⇒ ダイナミックな切岸、巨大な堀切【圧巻の山城跡が残る地域】  
まさに戦国時代の飛騨を物語る第一級の歴史資料

### ◆山城の世紀

- ・城郭とは ⇒ 軍事的な防御施設【南北朝時代に山城が出現し、応仁文明の乱以後】
- ・全国に分布する城館跡 ⇒ 約3~40,000もの城館が築かれる(その99%が戦国時代の城館)【世界史的に見ても尋常な数の城が築かれる】
- ・山城の機能 ⇒ 守護・戦国大名の巨大な山城、国衆の山城、村の領主の城、境目の城、対の城(陣城)など【その規模や構造などから築城主体や築城年代を想定することが可能】
- ・縄張り ⇒ 城館の平面構造【年代、地域、戦国大名などの特徴を見出すことも可能】
- ・その基本は普請(土木施設) ⇒ 作事(建築)は簡単な掘立柱建物程度  
基本形態 ⇒ 曲輪(兵の駐屯地)、切岸(遮断壁)、堀切・豎堀(遮断線)、土塁(防御壁)、虎口(出入り口)  
応用 ⇒ 多重堀切、畝状豎堀群、堀内障壁、折(横矢)、榣形虎口、馬出など

### ◆飛騨の山城

- ・飛騨市域における城館跡の分布 ⇒ 東側(高原郷)と西側(古川郷)に見事に分布が分かれる  
高原郷 ⇒ 江馬氏の領域【高原諏訪城跡、洞城跡、石神城跡、傘松城跡、寺林城跡、政元城跡、八幡山城跡、東町城跡、土城跡、梨打城跡】  
古川郷 ⇒ 国司姉小路氏(古川氏・小島氏・向氏)、三木氏【野口城跡、小島城跡、増島城跡、古川城跡、百足城跡、向小島城跡、小鷹利城跡、角川砦跡、忍城跡、広瀬城跡、高堂城跡】  
領域支配を城館の分布が見事に示している

### ◆全国的視野から見た飛騨の山城

#### 畝状豎堀群

- ・畝状豎堀群 ⇒ 野口城跡、小鷹利城跡、向小島城【戦国時代後期の最も発達した防御施設】  
青森県から熊本県まで広く分布 ⇒ 濃厚に分布する地域【越前、越後、土佐、北部九州】  
と希薄な地域【関東、近畿】

- ・戦国期後半とは ⇒ 天文から永禄(1532～1569)にかけての技法【元亀から天正(1570～1591)にはさらに進んで横堀や墨線の折が発達】  
一乗谷城跡 ⇒ 140 本におよぶ畝状堅堀【しかし一之丸、二之丸、三之丸には明確な虎口もなく、曲輪も自然地形に沿う構造】  
朝倉氏は元亀 3 年(1572)に江北小谷城に在陣し改修 ⇒ 畝状堅堀群を設けず、矩形の曲輪と折の付く土塁と横堀を廻し樹形虎口を形成【畝状堅堀群の次の段階の普請】
- ・飛驒の畝状堅堀群 ⇒ 姉小路氏城館IV期(16世紀中葉から後葉の時期)【三木氏の勢力が完全に古川盆地を掌握してから、金森氏の侵攻により滅びるまでの時期】  
三木氏による改修としての畝状堅堀群 ⇒ 広瀬城跡(高山市)、尾崎城跡(高山市)
- ・美濃 ⇒ 篠脇城跡(郡上市)、二日町城跡(郡上市)【越前朝倉氏による築城】  
飛驒は三木氏によって普遍的に用いられた防御施設

### **礎石建物**

- ・小鷹利城跡主郭曲輪 1(平坦地 1)で検出された礎石建物 SB73 ⇒ 3 間×8 間に 2 間×5 間の張り出し部が取り付く曲屋形状の建物【小鷹利 2=姉小路氏城館 II 期(古瀬戸後 IV 期(新)～大窯第 1 段階)】
- ・山城に住む時代 ⇒ 観音寺城跡(滋賀県東近江市)、小谷城跡(滋賀県長浜市)、鎌刀城跡(滋賀県米原市)、清水山城跡(滋賀県高島市)、芥川城跡(大阪府高槻市)、狗戸那城跡(鳥取市)などで検出された礎石建物【戦国期後半の戦国大名クラスの山城では居住施設としての礎石建物が出現】
- ・15 世紀後半の山城における礎石建物 ⇒ 篠脇城跡での庭園と礎石建物の検出【山城居住の最初期段階】

### **石積・石垣**

- ・向小島城跡、百足城跡、広瀬城跡 ⇒ 石積【裏込石(栗石)を伴わない在地の技術としての石積】

古川城跡、小島城跡、松倉城跡(高山市) ⇒ 石垣【裏込石(栗石)を伴う技術】

天正 13 年(1585)の金森長近による飛驒侵攻 ⇒ 一旦飛驒国内の拠点城郭を改修し、その後に新たな拠点城郭を築城【古川城・小島城→増島城、松倉城→(鍋山城)高山城】

- ・本・支城体制 ⇒ 金森氏による飛驒支配の本城【高山城】、支城【増島城、萩原諏訪城】  
寛永 10 年(1633)作成「日本六十余州図(飛驒国絵図)」⇒ 高山が唯一の城、古城として増島、東町、茂住、萩原、下呂、下原【慶長 5 年(1600)より元和元年(1615)までの支城が古城として表されている】

※これらの支城は天正 13 年直後より支城として築城された可能性が高い

阿波の場合 ⇒ 蜂須賀家政の阿波入国【一旦一宮城に入城し、徳島城を築城】

「太閤命移渭山城、渭山(一宮城カ)故長曾我部氏属城也、太閤以其規模狭隘、更築新城、課隣国助役、(略)於是分家士守諸城、以益田一正宮内/充 為一宮城番、稻田植元守脇城、中村重友守鞆城、益田正忠内/膳 守撫養城、森監物守西條城、林能勝守川島城、牛田一長掃部/助大西城、細川政慶主水/正 守牛岐城、後改/富岡、 附兵各三百、」(『蜂須賀家記』

## 卷之一) 【阿波九城】

※飛驒は阿波とともに天正期の本・支城体制が整った国

### ◆おわりに

- ・見事に残る飛驒の山城は飛驒の戦国史を物語る ⇒ 姉小路氏→三木氏→金森氏【そうした変遷が現存する城郭遺構や発掘調査で明らかとなった】
- ・全国的な戦国期山城のあり方を示す ⇒ 曲輪、切岸、土塁、堀切、敵状堅堀群【教科書的な山城】
- ・史跡指定はスタートライン ⇒ 今後の保存活用に大いに期待したい【山城を見るなら飛驒へ】

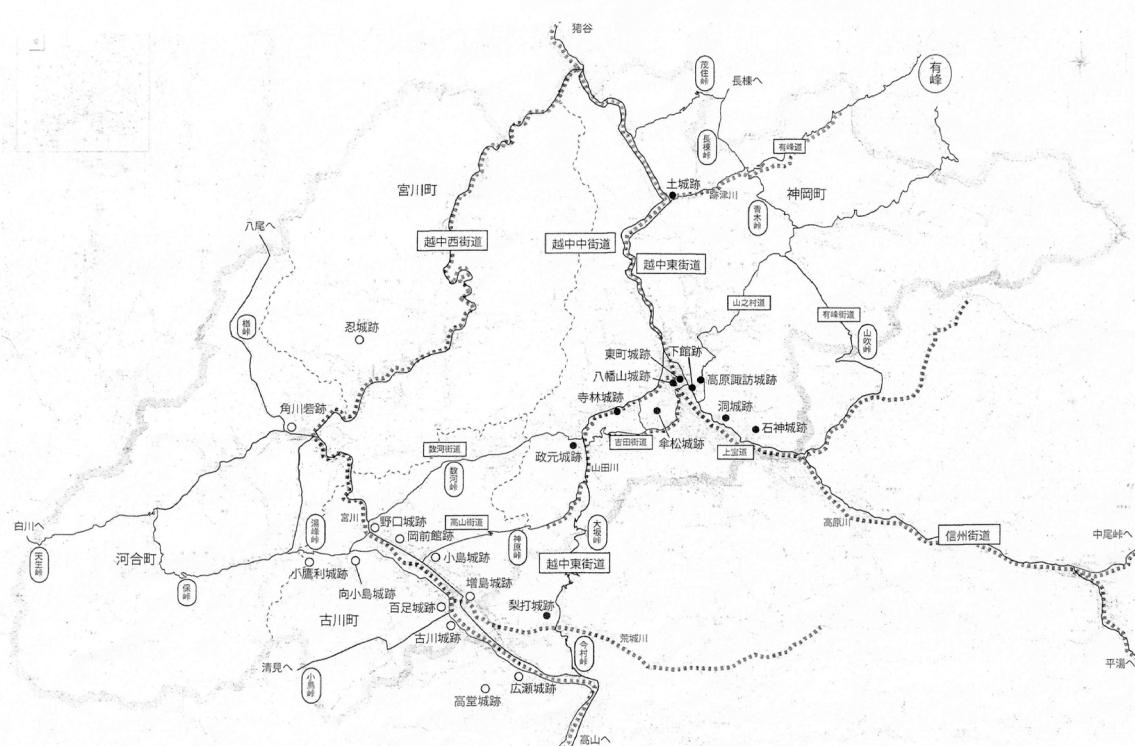


図1 飛驒市域の中世城館跡分布図(飛驒市教育委員会作成)



図2 一乗谷城跡縄張図(新谷和之氏作図『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要 2019』)

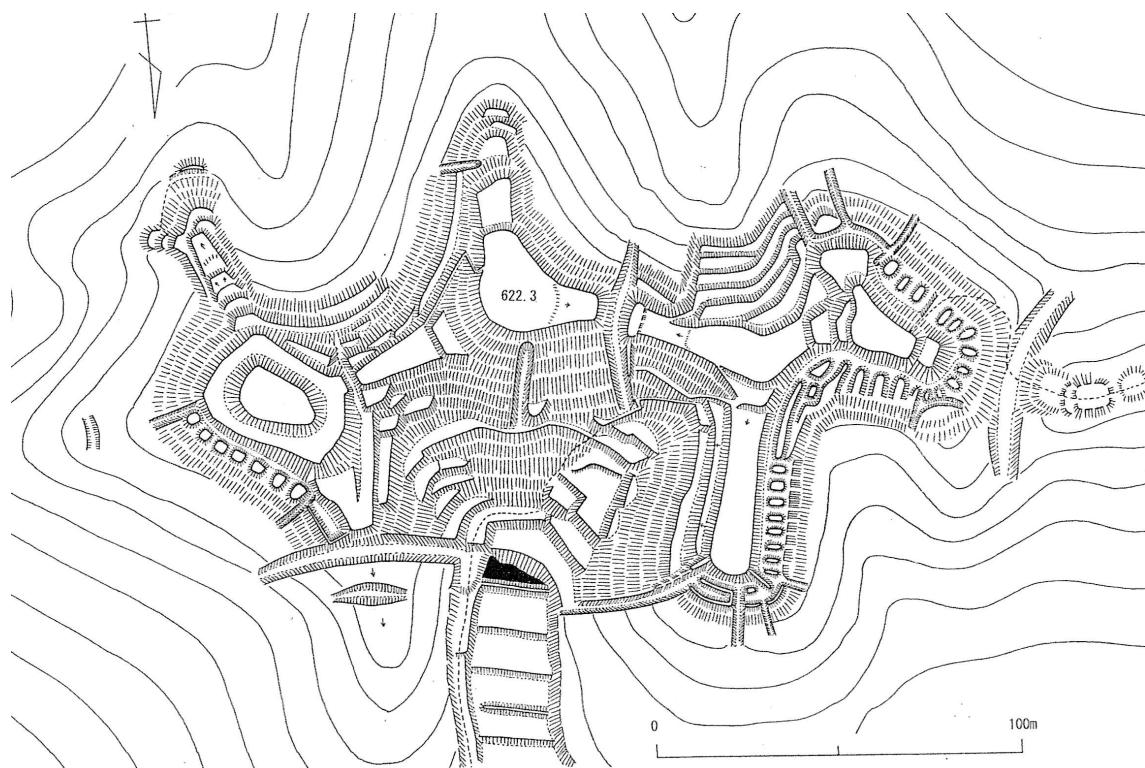


図3 広瀬城跡概要図(中井均作図)

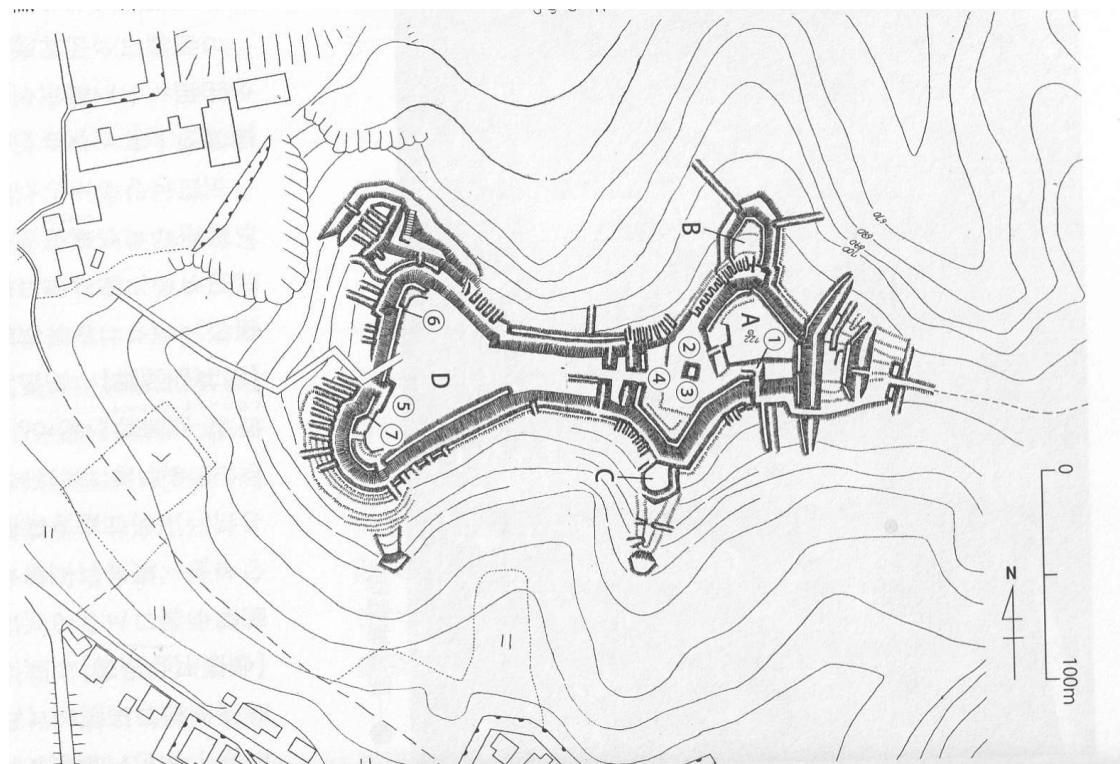


図4 尾崎城跡縄張図(佐伯哲也氏作図『東海の名城を歩く』)

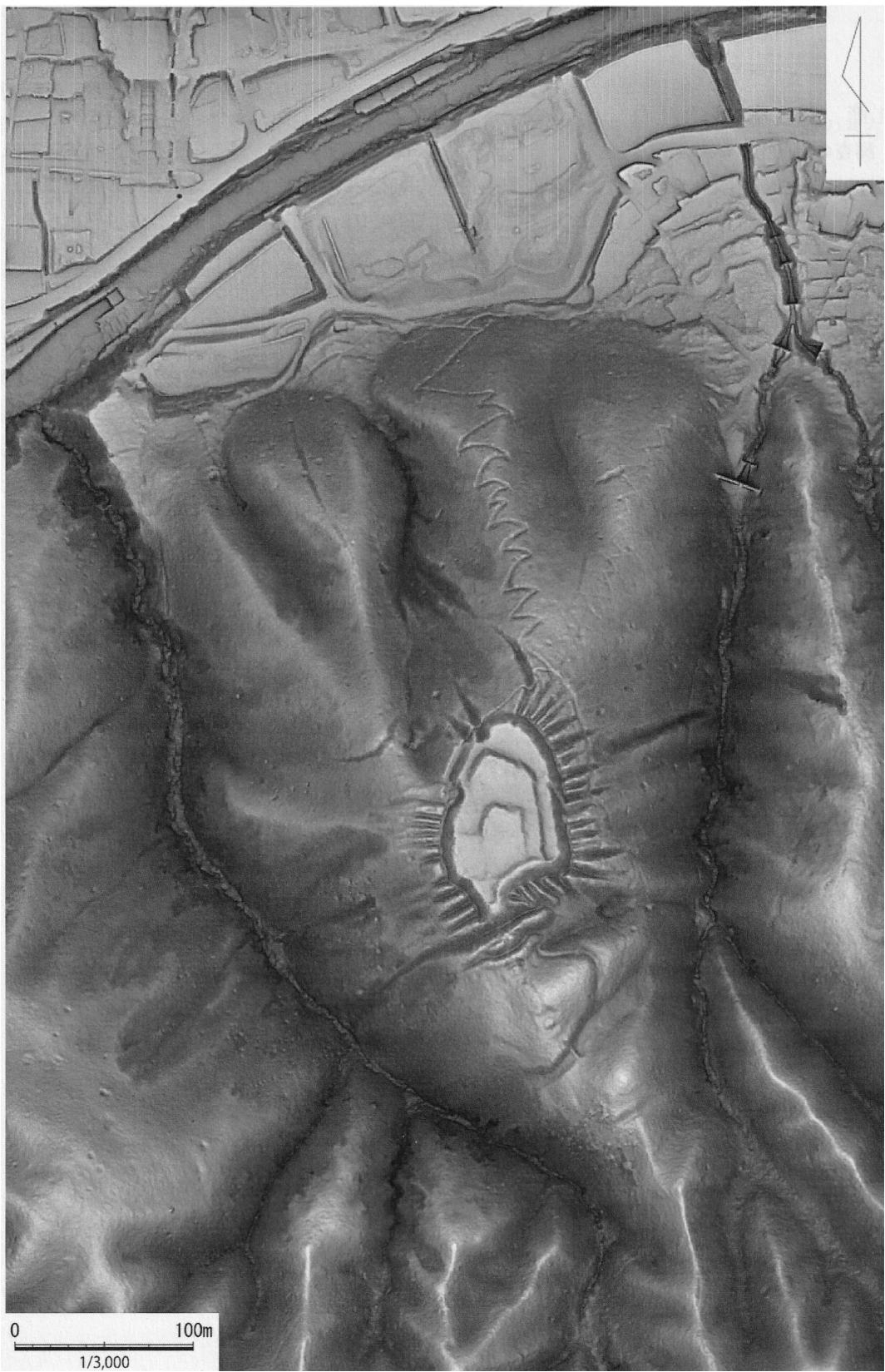


図5 篠脇城跡赤色立体図(郡上市教育委員会作成)

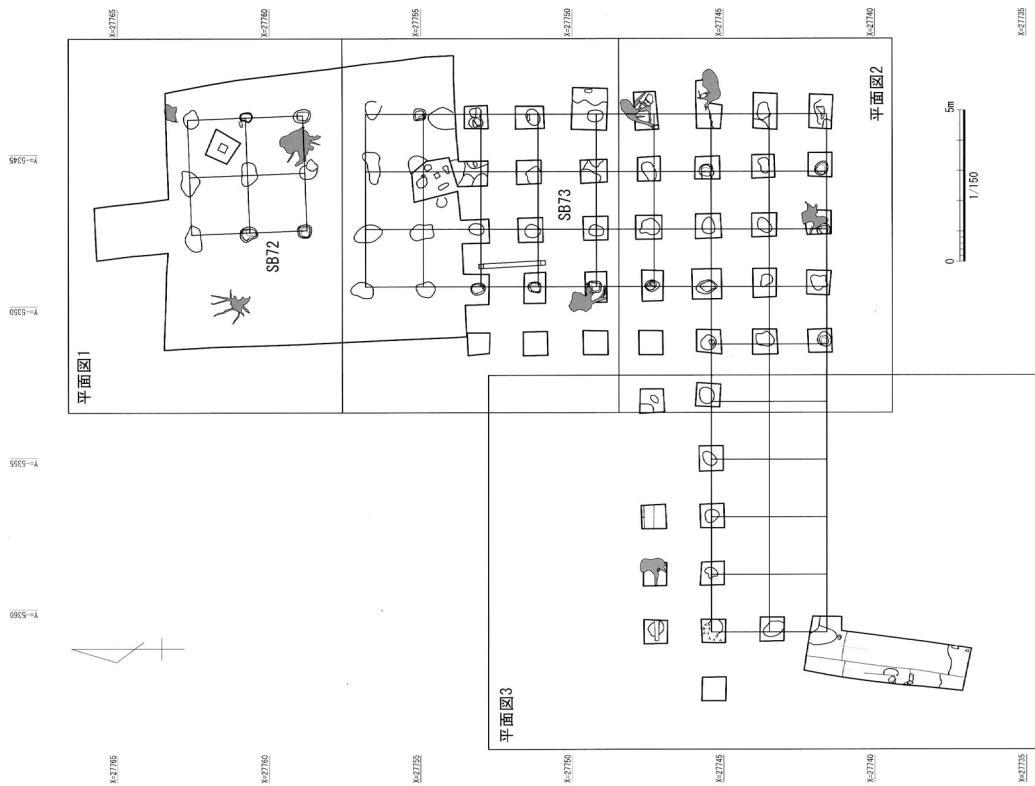


図 6 小鷹利城跡曲輪 1 碇石建物 SB73(『姉小路氏城館跡 -総括報告書-』)

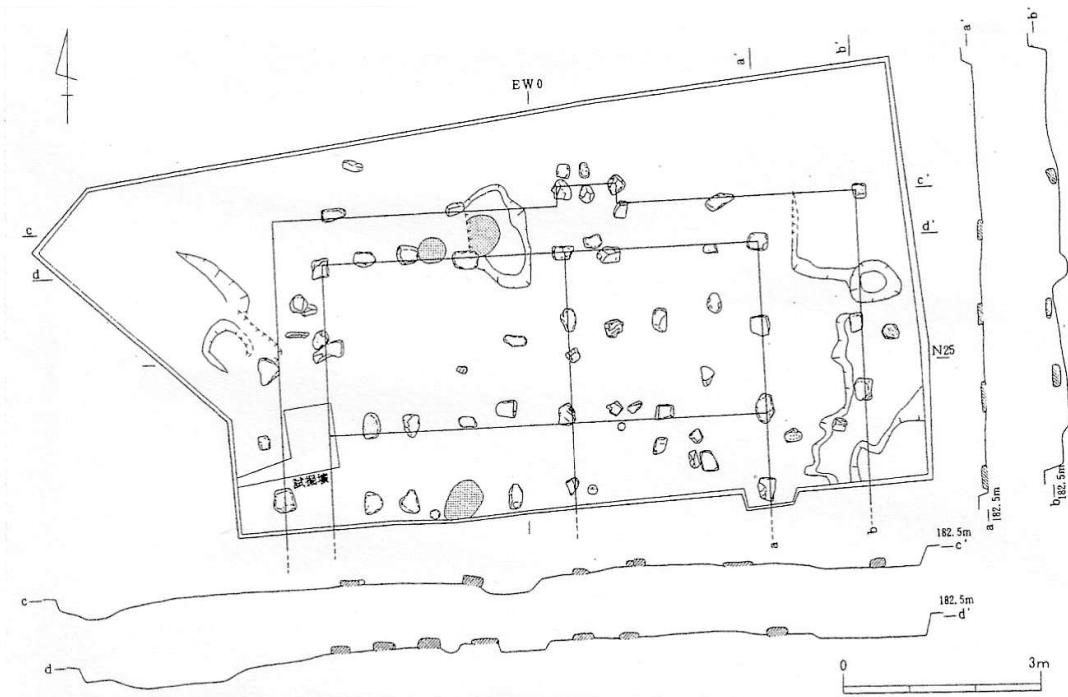


図 7 芥川城跡曲輪①礎石建物 1(『芥川城跡 -総合調査報告書-』)

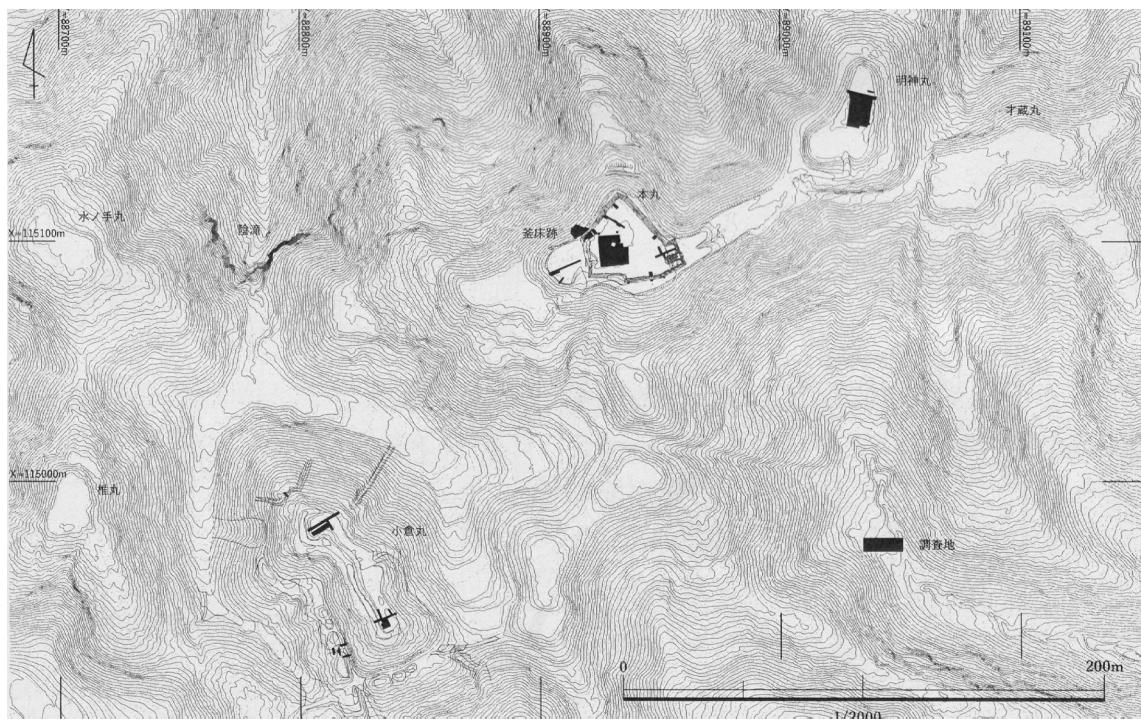


図8 一宮城跡測量図(徳島市教育委員会作成)

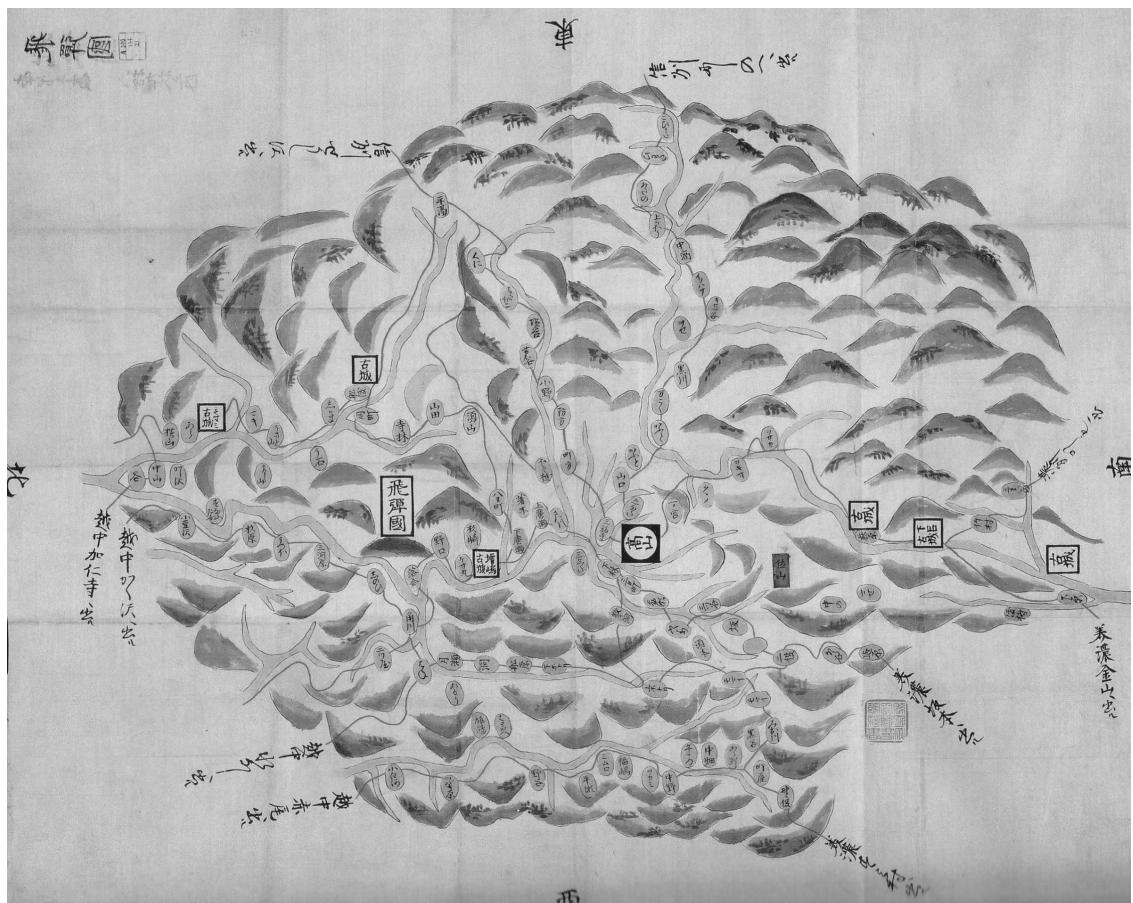


図9 「日本六十余州国々切絵図 飛驒国」(秋田県公文書館所蔵)

# 戦国時代飛騨国の武家とその支配

～姉小路氏・三木氏・金森氏をめぐって～

仁木 宏 (大阪公立大学)

## はじめに

姉小路氏城館の構築、隆盛、廃絶時期を想定するための通史

文献史料から論述

## 「国司」姉小路氏と3分家

「飛騨国司」姉小路氏の登場

14世紀後半、藤原家綱が「飛騨国司」に任じられる

この本流はずっと在京

姉小路氏の分家

15世紀初頭、古川、小島、向の3家に分家。在地領主となる

在京の本家の指示を、在地において執行

応永飛騨の乱 応永18年(1411)

幕府の料所化 → 古川尹綱の反乱

幕府、莊園領主などさまざま勢力が影響を与えていた

本流の姉小路師言；1420年代、1430年代以降、京都での活動は見られず

### 古川氏

古川昌家；公家の一員として京都で活動。「禁裏小番」

1441年；「姉小路」と呼称される

1456年；「姉小路宰相」とよばれる

姉小路(古川)昌綱；歌人として活動

幕府の命令をうけて所領保障、治安維持

15世紀末～ 飛騨の所領からの年貢納入が停滞 → 当主が京都から下る

16世紀初期 当主は在国。江馬氏との相克

### 小島氏

小島勝言；飛騨を拠点に。室町將軍に贈り物

勝言の嫡子が、「姉小路」との合戦で討死という。

15世紀末～ 記録が途絶える

向氏

15世紀後半；將軍に贈り物。朝廷から官途をもらう

幕府の命令をうけて国内の所領保障、治安維持

16世紀初頭；混乱していた様子

3氏とも……姉小路氏と把握されることがある

所領争いをおこなう      **★平地居館の段階**

守護京極氏は在京 → 在京していた古川氏が幕府・公家と、在国の3氏を結ぶ

守護被官が荘園押領をくり返すので、対立・武力抗争

15世紀後半の一時期；守護京極氏が飛騨国内に介入（三木氏の初見？）。

しかし、京極家内部の争いがあり、介入はなくなる

15世紀末の守護方や江馬氏との争闘をうけて築城が進んだ？

→ 国人勢力が伸長      **★山城構築の時代？**

## 三木氏の侵出と制覇

三木氏の進出

本拠；桜洞城、禅昌寺 益田郡、下呂市萩原付近

16世紀前期 高山盆地まで進出

天文9年（1540） 姉小路3氏や江馬氏と連携。江馬氏と縁戚関係

天文13年 三木直頼と江馬氏が戦闘？ → 「国主三木直頼」と名乗る

\*国人から一歩、頭抜けた「戦国領主」となった

天文23年 三木良頼がつぐ

弘治元年（1555）～ 姉小路3氏が衰退してゆく戦闘

「三ヶ御所城墨」が落城しそう？

三木との争い、内紛、江馬氏との争い？

永禄2年（1559） 三木良頼；姉小路（古川家）の名跡をつぎ、公家となる工作

姉小路氏から反対なし。「中納言」を自称

本拠は、変わらず益田郡

\*「戦国大名」？ ←発給文書が家臣連署状から当主直状へ

古川氏

永禄6年（1563） 古川家の人物は「存在」

小島氏

三木氏傘下の武将となり、小島城を維持。

（天正10年（1582）の八日町合戦で、三木方として戦う）

向氏

天文7年（1583） 小鷹利氏に改姓

16世紀後半 没落

江馬氏

16世紀後半 江馬輝盛など：活動が活発に

→ 三木氏と江馬氏は「戦国領主」

## 他国勢力との連携・侵入

甲斐武田信玄、越後上杉謙信の関与

三木良頼、江馬輝盛は上杉方。 江馬時盛は武田方

永禄7年（1564） 武田軍が飛騨に侵攻

元亀3年（1572） 越中に侵攻した上杉勢に呼応し、三木・江馬軍も越中侵攻

元亀4年＝天正元年 武田信玄死没

三木自綱；織田氏へ接近

天正7年（1579） 三木氏の城として松倉城（高山市）の存在が確認される  
江馬氏；上杉方 天正6年（1578）、謙信死没 → 織田氏へ接近

天正10年；織田方の武田攻めには三木氏・江馬氏とも協力

天正10年（1582）、本能寺の変 → 日本中で、騒乱

飛騨では、三木自綱 vs 江馬輝盛

10月27日 八日町合戦（高山市国府町）；両勢力の境界近く

三木が勝利し、輝盛は敗死

10月28日 小島時光（三木方）；高原郷に攻め入り、高原諏訪城が落城

→ 江馬氏の一部勢力は残る

天正11年 三木氏の当主が自綱から秀綱に代わる

このころ、三木氏の本拠は松倉城（高山市）。越中の佐々成政と友好関係？

天正13年 金森長近・可重父子（越前大野城主）が飛騨侵攻

羽柴秀吉；佐々成政と対立し、その余波で、佐々に味方した三木を攻めた

閏8月 金森軍が侵入。三木秀綱は死没

9月以降、一向一揆が勃発。金森は古川城ないし小島城に籠城

天正15年 金森は高山を本拠地に定める

元和元年（1615）以降、城割り。増島・萩原・下呂など廃城に。

元禄5年（1692） 金森氏は出羽国に移封

## おわりに

城館の構築時期、廃絶時期

戦国時代飛騨国……他国との共通点と個性

### 【主要参考文献】

- 『婦小路氏城館跡－総括報告書－』飛騨市教育委員会、2022年  
大下 永「飛騨における武家拠点」『「武家拠点科研」福井研究集会資料集』2021年  
堀 祥岳氏の多数の論稿など。

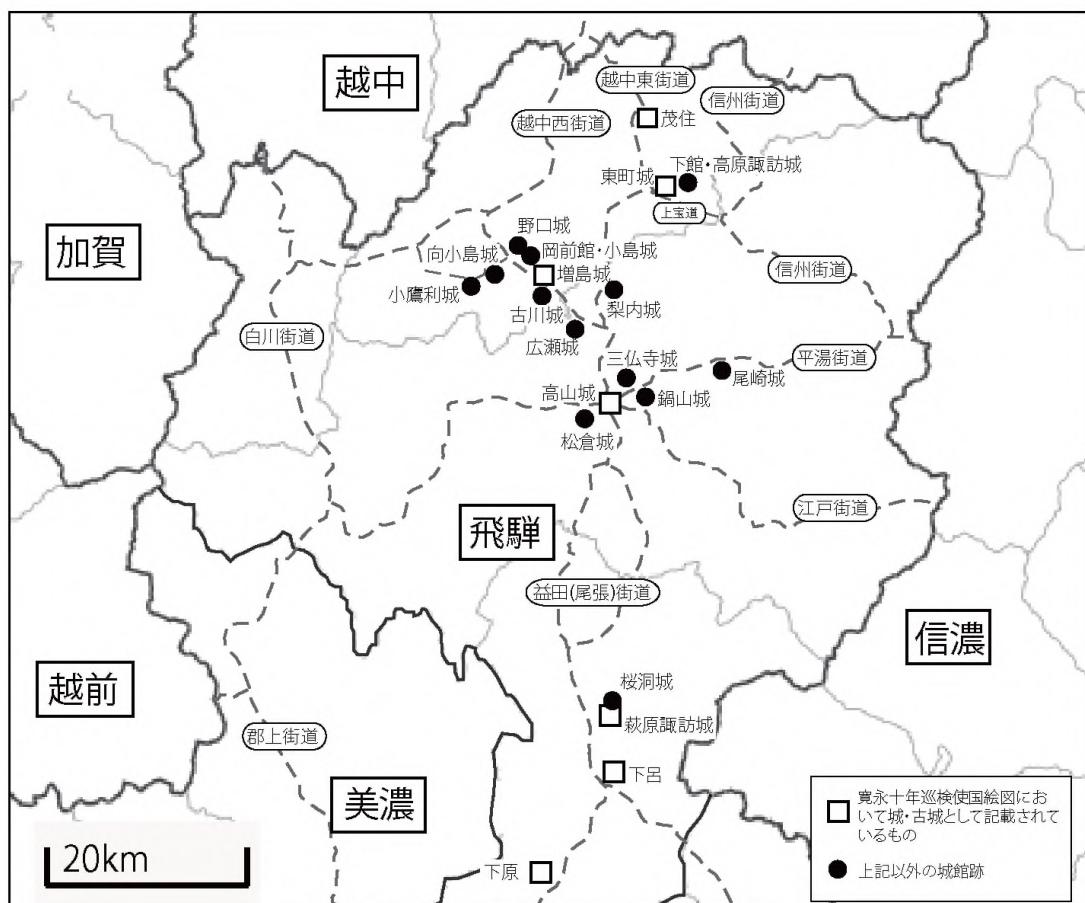


図1 飛騨国内主要拠点位置図

(大下 2021 より)

## 飛騨地方戦国期城郭石垣の様相—姉小路氏城館跡を中心に—

内堀信雄（岐阜市文化財保護課）

### はじめに

本稿では姉小路氏城館跡の発掘報告書刊行を受けて、飛騨地方の戦国期城郭石垣についての最新の成果をまとめ、画期の検討を試みる（図1）。

### 1 研究史

飛騨地方の戦国期城郭研究は、岐阜県中世城館跡総合調査を契機とした中井均氏や佐伯哲也氏による研究が画期をなす。中井氏は高山市松倉城高石垣について天正13年（1585）、金森長近によって改修されたものと推定した（中井2005、2014）。佐伯哲也氏も中井説を支持するとともに、飛騨地方の中世城館・山岳寺院の石垣を高さ・角度・裏込め石の有無・最大径1mの石の有無等に基づき、I期～IV期の4時期に編年した（佐伯2018）。両者とも金森氏による織豊系城郭石垣の導入を重視する。佐伯氏の研究では在地系の石垣も含めた分類・時期区分を行っている点が注目される。1997～2007年度に飛騨市増島城で発掘調査が行われ、織豊系と思われる石垣が多数発見された（飛騨市教委2010）。2012・13年、下呂市萩原諏訪城では織豊系城郭石垣が発掘された（下呂市教委2014）。

2019年、筆者は美濃地方で行ってきた石垣実測図比較を主とする研究方法を飛騨地方にも援用することで、分類・編年案を提示した（拙稿2019、2021a）。2022年、筆者は美濃地方の遺跡を主対象に、発掘調査が行われ背面造成に関する記載のある中世城郭・寺院の石垣を検討して新たな分類案を提示し、飛騨地方の江馬氏城館及び向小島城もあわせて紹介した（拙稿2022）。

2018～2020年度に飛騨市姉小路氏城館跡（向小島城・吉川城・小島城）の発掘調査で在地系や織豊系の石垣が調査された。ほぼ同時期の2019～2023年度には高山市松倉城において織豊系の石垣が調査された。姉小路氏城館跡の成果については、2022年に『姉小路氏城館跡総括報告書』（飛騨市教委2022、以下『報告書』と呼称）が刊行された（飛騨市教委2022）。

『報告書』では、層位学的検討や土器・陶磁器編年などの考古学的方法に基づき、城館毎の時期変遷を推定した後、文献・測量・歴史地理などの調査成果を総合して、姉小路氏城館跡の変遷案（I～V期）を提示した。I・II期は姉小路期、III・IV期は姉小路氏と三木氏の並立期、V期は金森期に比定できる（表2）。石垣については、背面造成を含め詳細な検討がなされるとともに、各城館の未発掘石垣に関しても図面を作成した。飛騨地方の石垣研究の現時点の到達点を示す。今後松倉城の発掘成果を合わせて検討することで、飛騨地方の石垣研究が大きく前進すると予想される。

### 2 石垣の分類（図2）

筆者が2019年に行った分類案に2022年作成の背面造成法による細分案を加味した分類

案を示す。

#### 石垣A 0類

石垣背面に裏込め礫を入れないものの内、石垣背後に裏込めを入れるためのカットラインが存在しないもの。石材の積み重ねと背後の造成を同時に行っている。古川城及び向小島城の発掘で確認された。

#### 石垣A I類

石垣背面に裏込め礫を入れないものの内、石垣背後に裏込め（土や砂）を入れるためのカットラインが存在するもの。古川城及び江馬氏城館の発掘で確認された。石垣A 0類と石垣A I類を本稿では「伝統石垣」と総称する。

#### 石垣A II類

石垣背面に裏込め礫を入れるもの。礫の入れ方には下方のみのもの、上方まで入れるものなどがある。本稿では「新型石垣」と呼称する。

石垣A 0～A II類の石材は小形（30 cm前後）～中形（50～80 cm程度）が主で、まれに大形（1 m程度）のものがみられる。A II類の石材は比較的規模が大きい傾向がある。角度は垂直に近く、上下石材の合わせ目（接点）は表面近くにある。間詰石はほとんどみられず、コーナーに算木積みの意識はみられない。美濃地方の大桑城・伊木山城・岐阜城など限られた城館にのみみられる。現在までのところ飛騨地方では未確認である。

#### 石垣B類

石垣背面に裏込め礫を入れるもの。いわゆる織豊系城郭の石垣で、野面積みと呼ばれるものである。本稿では「織豊系城郭石垣」と呼称する。中形～大形の石材を主体とし、傾斜をつけて積む。上下石材の合わせ目（接点）は表面から少し奥に入ったところにあり、結果として石材間に空隙ができ、そこに間詰石を充填する。コーナーには算木積みの意識がみられる。古川城及び小島城で確認。

#### 石垣B'類

石垣A類かB類かの区別が難しいグループ。高山市松倉城及び鍋山城の石垣の一部にみられる。本稿では扱わない。

#### 巨石石垣

1～1.5m以上の大形の石材を主体とする石垣で、板状の石を立て並べているものと石垣状に積み上げているものがある。石材はほぼ垂直に積み上げられる。基礎は穴を掘って石を据える場合と、面の上に据える場合がある。裏込め礫は下方にのみ充填するものと上方まで入れるものがある。これまで飛騨地方には無いと考えていたが、『報告書』に基づき再検討した結果、古川城と小島城の未発掘石垣の一部が巨石石垣に相当する可能性が高くなった。

### 3 姉小路氏城館の石垣

#### （1）古川城（図3）

内枠形虎口の発掘で2時期の石垣が層位的に確認された。すなわち、下層の古川3期（IV

期、三木期)に伝統石垣(土留め石垣〈A 0類〉・石垣2〈A I類〉)で護岸された虎口の通路が作られ、古川4期(V期、金森期)に織豊系城郭石垣(石垣1〈B類〉)によって改修された。

曲輪4西側石垣については、未発掘であるが、実測図を検討した結果、巨石石垣である可能性が高いと考えた。

### (2) 小島城(図4)

主郭(曲輪1)の発掘調査により、南側斜面で3段(推定)の織豊系城郭石垣(石垣2・3〈B類〉)を確認。また、虎口の発掘でも織豊系城郭石垣(石垣1〈B類〉)を確認。虎口背後の石垣(未発掘)もコーナーの算木積みが明瞭な織豊系城郭石垣である。いずれも小島2期(V期、金森期)に比定されている。

曲輪2西側斜面石垣については、未発掘であるが、実測図の検討により巨石石垣の可能性が高いと推定した。

### (3) 向小島城(図5)

発掘調査により平坦地1南斜面から土留め石垣(A 0類)がみつかった。向小島1期(IV期、三木期)に帰属する。

## 4まとめ(表1・2)

以上の検討結果をまとめると表1・2のようになる。この表からまず伝統石垣(A 0・A I類)の山城への採用が画期となることがわかる。伝統石垣の時期について『報告書』では姉小路氏城館IV期に帰属すると推定しており、III期とIV期の間頃に画期(画期1)が存在したとみられる。なお、伝統石垣の山城への採用時期については、山上居館の成立(注1)と関係して、さらにさかのぼる可能性もあると考えている(注2)。今後の調査事例の増加を待ちたい。

古川城と小島城の推定巨石石垣については層位や遺物から時期を決められないが、大桑城伝岩門(1538年頃)や岐阜城一ノ門(1550年以降)、岐阜城山麓居館(1567年以降)などから、姉小路氏城館III期後半～IV期頃に帰属すると思われる。伝統石垣(A 0・A I類)の山城への導入とほぼ同じ時期に巨石石垣が飛騨の2城に採用されたことになり、巨石石垣からもこの時期は画期(画期2)となるだろう。

城郭研究者の佐伯哲也氏は巨石石垣のうち越中増山城について、「城主が権力を誇示するために用いた」と推定している(佐伯2017)。佐伯氏の指摘を参考にすると、古川城の推定巨石石垣は1560年に古川家の名跡を継いだ三木良頼が、国司家の権威・権力を示すために築いた可能性がある。姉小路三家のひとつ小島氏は三木氏に付き従い生き延び、金森氏の飛騨侵攻の際滅ぼされたとされる。したがって、小島城の推定巨石石垣は古川城に三木氏が推定巨石石垣を築いてから間もなく、古川城(三木氏)に対抗して姉小路氏(小島家)の権威を示すために築かれたのではないだろうか。

最後に姉小路氏城館IV期とV期の間に画期(画期3)があり、石垣技術が伝統石垣(A 0・

A I類)・巨石石垣から織豊系城郭石垣（B類）に交替したことがわかる。これまで指摘されてきたとおり、この画期は天正13年（1585）、羽柴秀吉の命を受けた金森長近・可重父子が飛騨に侵攻し、三木氏が滅亡。その後、金森氏により城と町の整備が進められた時期に相当すると思われる。

### おわりに

以上、飛騨地方の石垣の様相について、姉小路氏城館跡を中心に考えてきた。姉小路氏城館III期とIV期の間に伝統石垣（A 0・A I類）の山城への導入（画期1）及び一部の山城への巨石石垣採用（画期2）という2つの画期がほぼ同時期に認められた。また、IV期とV期の間には伝統石垣・巨石石垣から織豊系城郭石垣（B類）への交替という画期（画期3）が認められた（表2）。

画期を美濃地方と比較すると、美濃地方の山城への伝統石垣導入は姉小路氏II期併行期とみられ、飛騨地方と時期差が認められる。巨石石垣の導入については美濃地方とほぼ同時期の可能性あり、中部地方各地の守護クラス城館における権威・権力と関連づけた巨石石垣流行の一環と理解できそうである。美濃地方の織豊系城郭石垣（B類）の出現時期は、信長による稻葉山城（後の岐阜城）占領（1567年）以降と古いが、これは岐阜城が織豊系城郭石垣の成立に関わる場所であることによる。このように各画期について飛騨・美濃で時期差はあるものの、伝統石垣、巨石石垣、織豊系城郭石垣という変遷の大筋は一致することがわかった。今後、さらに石垣事例の集成につとめ、実態の解明を進めたい。

表1 姉小路氏城館の石垣（『報告書』に基づき作成）

城館	場所	姉小路氏城館時期区分と築城主体	
		(III期～) IV期（16中～後、大窯2～3、土師器皿6・7）	V期（16末～17初、大窯3～4）
		姉小路氏・三木氏	金森氏
古川城	内柵形虎口（発掘）	土留め石垣（A 0類） 石垣2（A I類）	石垣1（B類）
	曲輪4西斜面（未発掘）	巨石石垣（推定）	
小島城	曲輪1南斜面（発掘）		石垣2・3（B類）
	虎口（発掘・未発掘）		石垣1（B類）
	曲輪2西斜面（未発掘）	巨石石垣（推定）	
向小島城	曲輪1南斜面（発掘）	土留め石垣（A 0類）	

表2 石垣画期と歴史的事象（『報告書』344～345pを加筆改変）

時期	歴史的事象	古川城	小島城	向小島城
Ⅱ期 前葉 古瀬戸後IV新～大窯1 土師器皿3・4	・1499年 古川家当主が在国開始 ・～1521年 三木氏が高山盆地に進出	柱穴	土坑	櫓台・曲輪・切岸など造成
Ⅲ期 16世紀前葉～中葉 大窯1～2 土師器皿4・5	・1531年 古川城落城 ・1554年 姉小路氏三家叙任 ・1560年 三木自綱が古川家の名跡を継ぐ ・1562年 三木良頼、従三位・参議叙任			山城居館体制（仮称）
Ⅳ期 16世紀中葉～後葉 大窯2～3 土師器皿6・7	・1575年 三木自綱上洛、信長に駿馬献上 ・1575年 古川城山麓部使用 伝統 ・1582年 八日市の戦い	巨石 虎口：石垣2(A I)、 土留め石垣(A O) 櫓台：礎石建物	巨石石垣(推定) 虎口：石垣1(B)	平坦地1：土留め石垣(A O)
Ⅴ期 16世紀末～17世紀初 大窯3～4	・1585年 金森氏侵攻、三木氏滅亡 ・1615年 一国一城令	織豊	虎口：石垣1(B) 曲輪1：石垣2・3(B)	画期1 画期2 画期3

注1：『報告書』によれば姉小路城館Ⅱ期（15末～16前、後IV新～大窯1、土師器皿3・4）に主郭や櫓台など各山城の基本的な形が造形された。筆者はこの時期の拠点となる山城は篠脇城の事例のように居館として使われていた可能性があると考えている。かつて前川要氏は江馬氏城館跡の報告書において14世紀末から15世紀前半頃、畿内を含む西国各地において方一町あるいは方二町の平地方形館を基本とした地域社会の支配制度「方形館体制」が成立すると指摘した（前川1995）。前川氏の指摘を踏まえて方形館体制から移行した山城を居館とする領域支配を「山城居館体制」と仮称したい（図6）。山城居館体制の成立は、飛騨・美濃地方では姉小路城館Ⅱ期併行期頃と予想している。守護クラスにこの支配体制が普及するのは一段階遅れた大窯1段階頃以降とみられる。美濃地方における守護クラスの支配体制は別稿で「大桑城体制」と呼んだものに相当する（拙稿2021b）。

注2：美濃地方の郡上市篠脇城では遅くとも姉小路城館Ⅱ期併行期（古瀬戸後期IV新）には山上に伝統石垣（A O類）を備えた居館が成立している。姉小路城館のひとつ小鷹利城では石垣未確認であるが、Ⅱ期の山上に居館の主たる構成要素であるL字状の礎石建物が建てられている（飛騨市教委2022）。さらに平地の居館・江馬氏城館ではすでに14世紀末～15世紀頃には伝統石垣（A I類）が採用されている（神岡町教委2001）。これらのことから、未確認であるが姉小路城館Ⅱ期のいくつかの山城に伝統石垣を備えた居館が成立した可能性があると考えている。

## 参考文献

- 前川要 1995 「結語」『江馬氏城館跡I』 神岡町教委・富山大学人文学部考古学研究室  
神岡町教委 2001 『江馬氏城館跡V』

中井均 2005 「松倉城」『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第4集、岐阜県教委  
飛騨市教委 2010 『増島城跡』  
中井均 2014 「記念講演会要旨—城から探る飛騨の戦国時代—」『城から探る飛騨南部の戦国時代資料集』下  
呂市教委他  
下呂市教委 2014 『萩原諏訪城跡発掘調査報告書』  
佐伯哲也 2017 『戦国の北陸動乱と城郭』戎光祥出版  
佐伯哲也 2018 「松倉城の石垣について」『飛騨中世城郭図面集』桂書房  
拙稿 2019 「飛騨地方の戦国期城郭石垣の様相」(飛騨山城セミナー発表資料)  
拙稿 2021a 「美濃・飛騨地方戦国期城郭石垣の様相」『史跡岐阜城跡 総合調査報告書I』岐阜市  
拙稿 2021b 「斎藤道三登場前後の城と町」『天下人信長の基礎構造』高志書院  
拙稿 2022 「美濃における織豊期以前の城郭石垣」『中世城館の諸相—山頂の城と山麓の館—』第37回考古  
学研究会東海例会  
飛騨市教委 2022 『姉小路氏城館跡総括報告書』

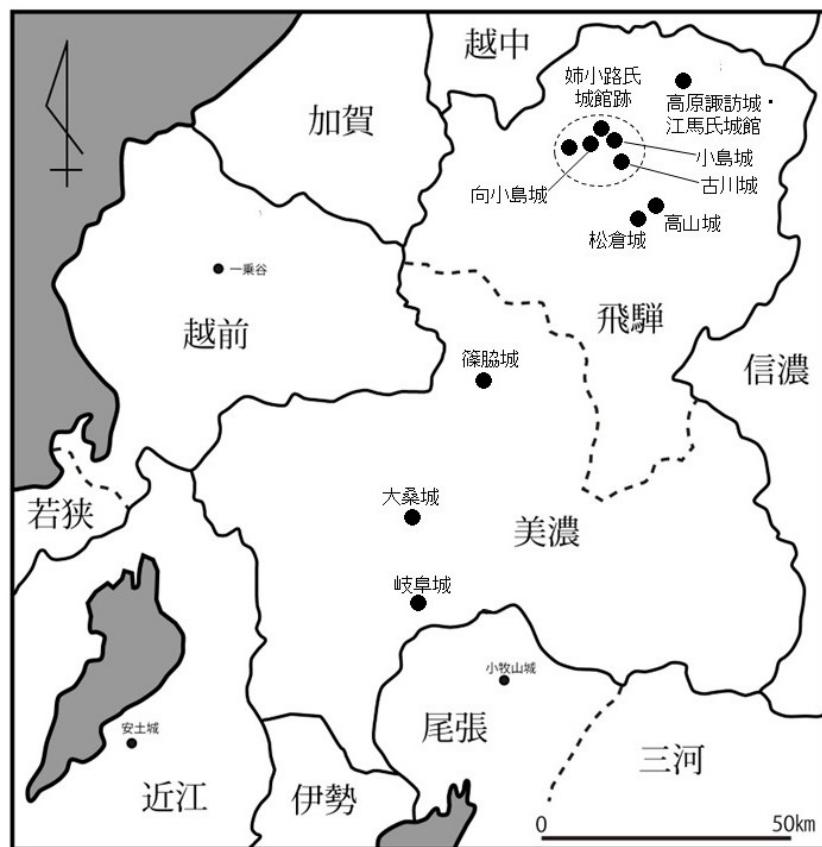


図1 位置図

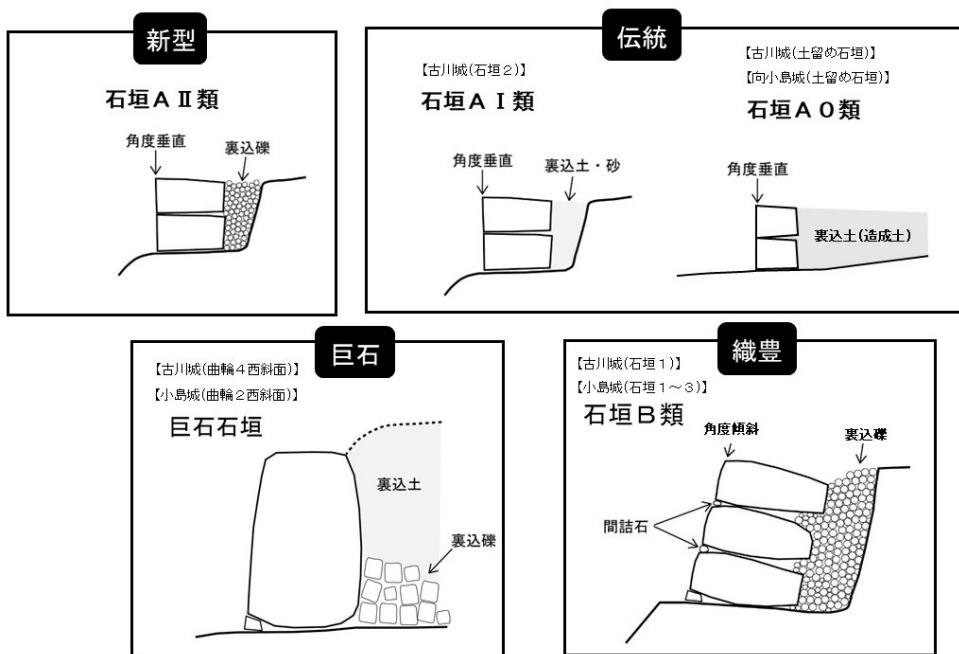


図2 美濃地方石垣分類模式図 (【】内は姉小路氏城館の石垣)

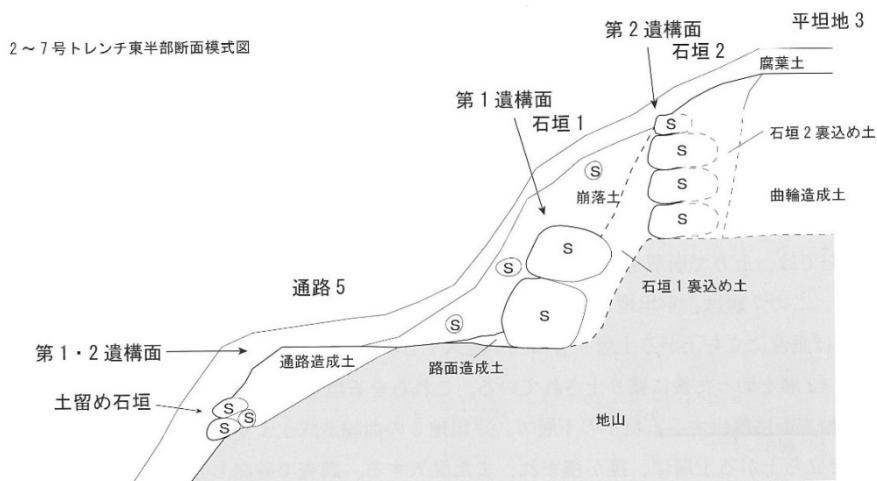


図3 古川城2～7号トレンチ東半部断面模式図 (『報告書』189p)

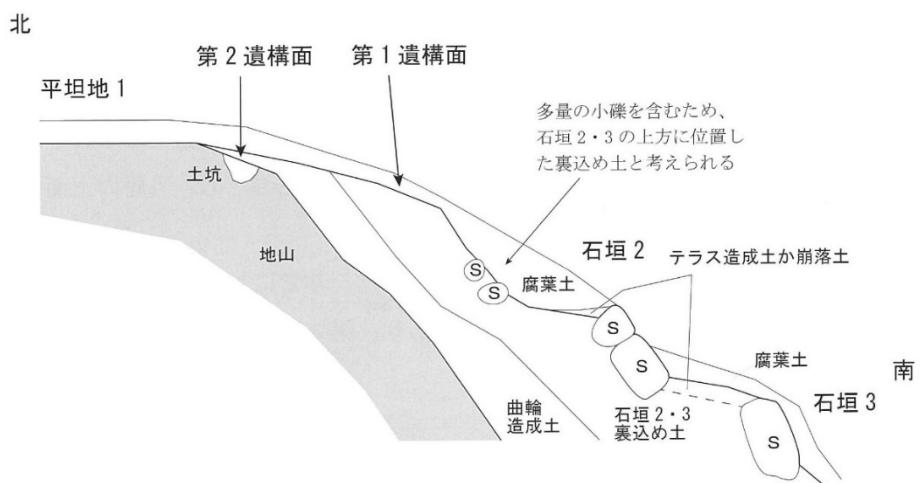


図4 小島城4・5号トレンチ断面模式図（『報告書』222p）

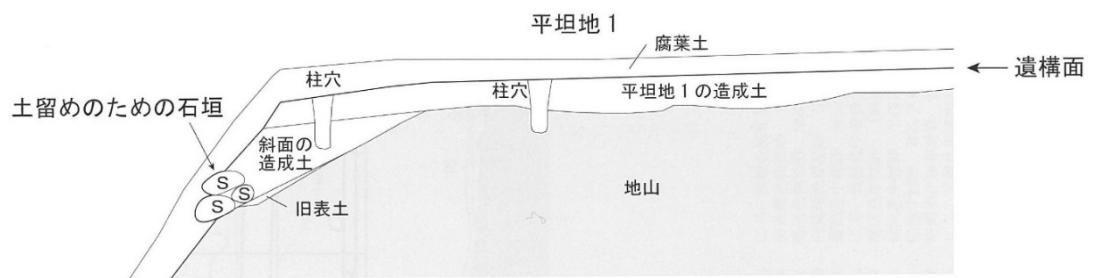


図5 向小島城1号トレンチ断面模式図（『報告書』275p）

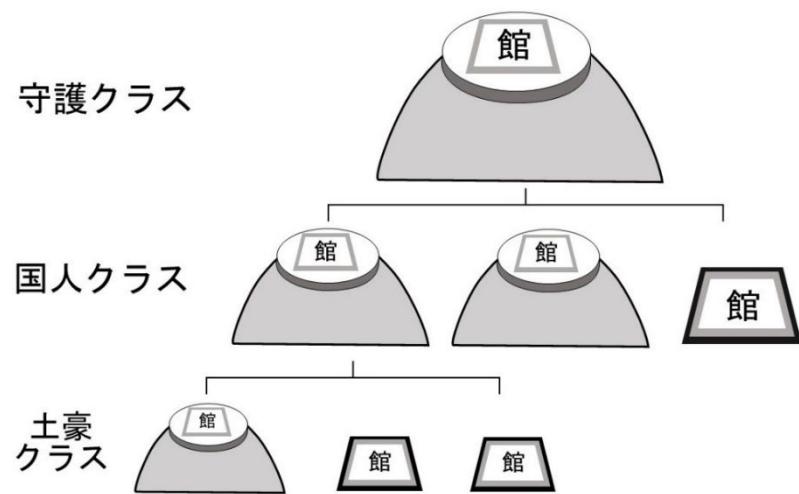


図6 山城居館体制イメージ

# 縄張りから見た姉小路氏城館跡について

加藤理文（日本城郭協会理事）

## 1 姉小路氏城館跡を構成する城郭群

姉小路氏城館跡を構成する城郭群は、古川城跡・小島城跡・野口城跡・小鷹利城跡・向小島城跡の5つの城跡です。いずれの城も旧古川町中心部を北西から南東に抜ける越中西街道、宮川を見下ろす山上部に築かれ、ここを掌握・支配するための城であったと考えられます。

姉小路氏城館跡については、文献資料調査・測量調査・歴史地理調査・発掘調査が実施され、それらの成果を総合して飛騨市教育委員会より『姉小路氏城館跡－総括報告書－』が2022年度に刊行され、その成果がまとめられました。今回、この総合調査の成果や所見を基にして、姉小路氏城館跡を構成する5つの城跡の構造についてその特徴や共通性をまとめ、姉小路氏の築いた城を見ていくことにします。

## 2 姉小路氏城館跡の変遷

14世紀代に、姉小路氏が飛騨国司として入国し、岡前館を居館としていた可能性が指摘されており、この時点では山城は築かれてはいませんでした。その後15世紀にはいると、古川氏（古川郷）・小島氏（小島郷）・向氏（小鷹利郷）と拠点とする地域ごとに3家に分かれ、15世紀の後半になると、領地をめぐり3家が相争うようになります。争いが日常化すると、平地居館から山上部に戦闘用の城が築かれることになり、古川城・小鷹利城がこの頃から利用が開始されたと考えられています。

明応8年（1499）、古川氏が在国を開始します。16世紀前半の大永元年（1521）頃までに三木氏が高山盆地に進出してきます。享禄4年（1531）、古川城が落城したとの記録が見られますがはっきりしません。高山盆地に進出した三木氏の勢力が、徐々に古川盆地へと伸張してきたため、各地で争いが増加し、そのため山頂部に戦いに備えた城が築かれるようになってきます。古川城の最高所の曲輪造成、小島城の最高所の曲輪や櫓台の造成、小鷹利城の主郭のL字状の礎石建物もこの時期と考えられます。少なくとも、古川城・小島城・小鷹利城が築かれ、戦闘に備えた堀切や土塁、切岸を設け、他氏からの攻撃に対し守りを固めた城が恒常化した時期になります。

天文23年（1554）、3家は叙任されていますので、この時期まではそれぞれの拠点を中心に地域支配が出来ていたと思われます。ところが弘治2年（1556）になると姉小路氏3家の拠点が落城しそうだと言われ、向氏がここで史料から消滅します。



第1図 姉小路氏城館跡位置図

永禄3年（1560）、三木良頼が古川氏の名跡を継ぐと、同6年を最後に古川氏も、資料から消えてしまいます。三木氏の勢力拡張により、古川氏、向氏が衰退していくと捉えられます。古川城も小島城も、引き続き維持されると共に、野口城が新たに築城されることになります。主郭、櫓台、切岸など現在見られる遺構群は、この時設けられたと考えられます。小鷹利城が、この頃から使用が停止されたと想定されます。三木氏は、永禄5年（1562）から、姉小路氏を名乗ることになります。

古川盆地へ侵攻した三木氏は、古川氏、向氏を滅ぼし、やがて古川盆地の完全掌握に成功します。三木氏は、古川城で山上の礎石建物、山麓の武家屋敷・寺社等を整備し、小島城・野口城・小鷹利城では、盆地の外に向けた防備強化が施されます。小島城では、神原峠方面に堀切・豊堀を、野口城では数河峠方面に大規模な堀切と敵状豊堀群を、小鷹利城では白川郷方面に敵状豊堀群や堀切を増強することになります。さらに、向小島城が新規に築かれ、やはり白川郷方面に敵状豊堀群を設けています。16世紀後半の、金森軍の侵攻を前にして、姉小路氏城館と呼ばれる城郭群は、防備強化が施され、軍事的な色彩を帯びた城に変化しました。

天正13年（1585）、豊臣秀吉は越中の佐々成政討伐を決定、同時に姉小路氏（三木氏）の支配する飛騨国討伐も行うこととし、金森長近に命を下しました。8月中に越中から飛騨に侵入すると、三木氏に領土を奪われた勢力が助成し、金森軍を先導します。長近本隊は越中から、別動隊の可重が飛騨方面からと、南北から挾撃することになります。三木氏は、同盟者の内ヶ島氏理と抵抗しますが、まず氏理の本拠帰雲城が金森軍に占拠されたため、氏理が降伏しました。大軍の金森勢の前に、三木氏の有力者も討死や自害が相次ぎ、最終的に三木氏の本拠の高堂城攻めにより降伏、当主の姉小路頼綱は助命され、都に護送されました。

金森氏は、古川城と小島城を石垣造りの城に改修し、古川郷支配の拠点とします。野口城・小鷹利城・向小島城の3城の機能は、この時点ですでに停止します。やがて、増島城を整備し拠点とすると、古川城・小島城も機能が停止することになります。

### 3 姉小路氏城館跡に関わる5城の状況

各種調査によって判明した個別城郭の特徴について、簡単にまとめ姉小路氏城館の共通点や差異について傍観したいと思います。

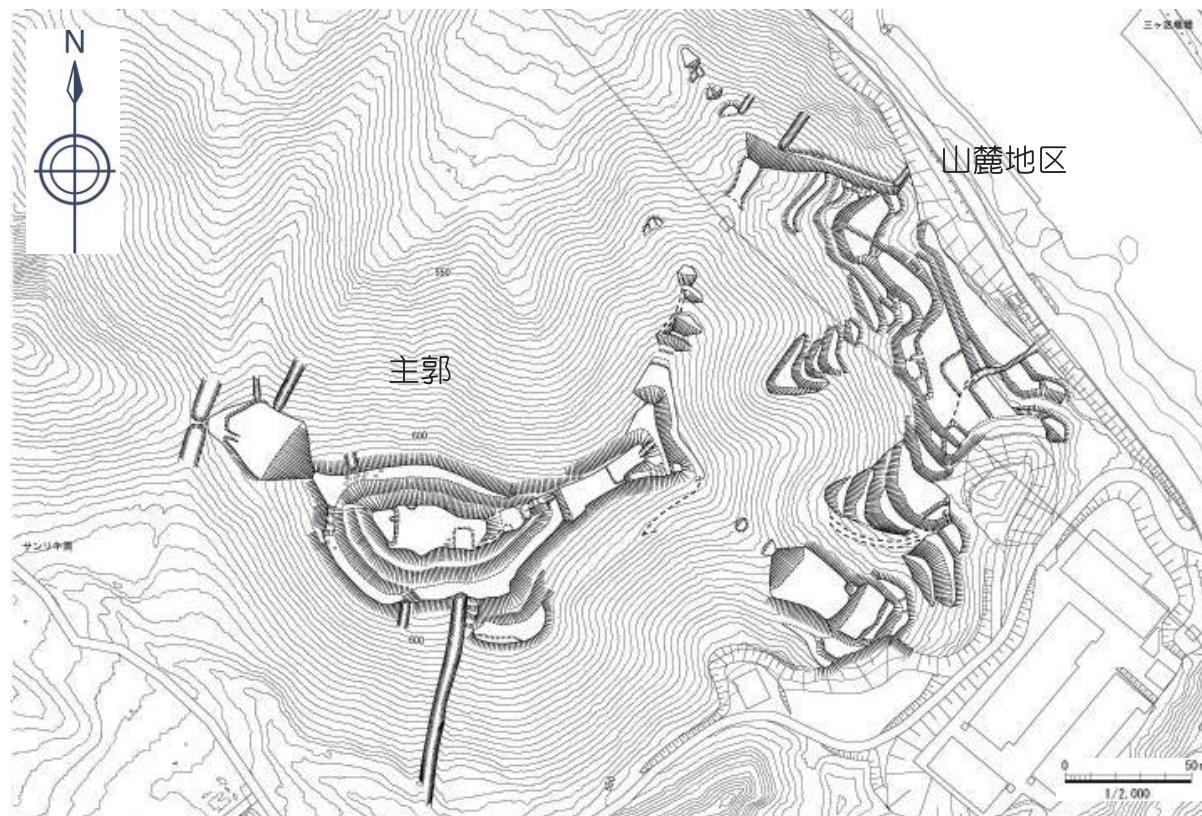
#### (1) 古川城跡

城は、古川盆地の西端、宮川の左岸に位置しています。山上部（標高628m）の中枢部から東側宮川に面した山麓まで、曲輪群が連続して分布し、ある時期、山麓部と山上部が同時併存して機能を果たしていたと考えられます。

最高所に約45m×15mの主郭を配置し、その西端に1m程の高まりが櫓台と推定されます。発掘調査で礎石建物が検出されていますが、櫓と認定される状況ではあり

ませんでした。また、主郭でも 5 軒×3 軒の礎石建物が検出されています。これらの建物は、16 世紀前半から中頃機能を果たしていたと考えられています。主要部の周囲は、当初切岸でしたが、金森長近の手によって石垣が廻らされました。この主要部の一段低く帯曲輪が全周し、金森段階に東側のみ石垣が積まれています。東側の尾根続きには、細長い曲輪が続き、南東下に石垣造りの虎口と通路が残ります。この細長い曲輪の東と南面は石垣が想定されます。虎口を下ると二段の帯曲輪が見られ、その下に堀切を挟み階段状の小曲輪が見られます。西側は、帯曲輪が一部張り出し、その直下が切岸となり、曲輪を挟んで谷地形を利用して堅堀によって城域が区切られています。また、帯曲輪南側に山麓まで続く堅堀が設けられ、斜面移動を防いでいます。姉小路氏段階は、石垣は無く、尾根筋に階段状の曲輪を設け、両サイドを谷地形や堀切で区切った単純な構造の城で、山麓部に展開が想定される巨屋敷の詰め城的利用が想定されます。

山麓部に、南側から東側山腹・山麓に大小の平坦地が見られ、武家屋敷地との伝承が残されていますが、現状では何とも評価するのが難しいと言わざるを得ません。



第2図 古川城跡遺構配置図

## (2) 小島城

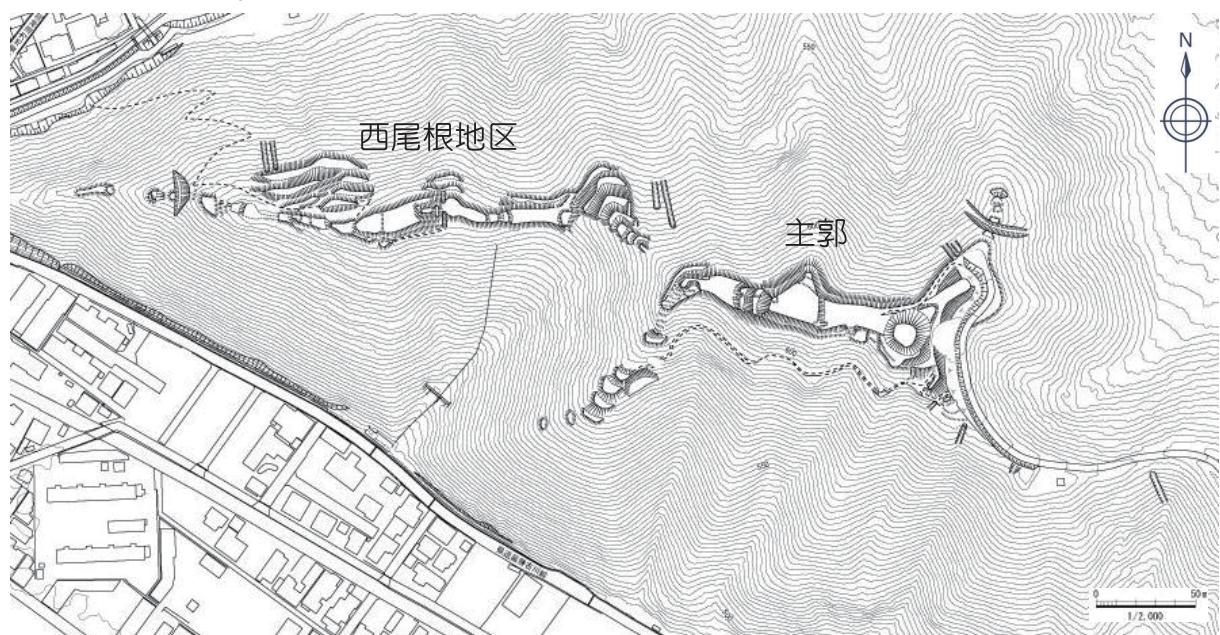
城は、宮川とその支流太江川に挟まれた山頂（標高 655m）に位置しています。小島氏の居城と伝わり、南北に伸びる尾根筋を利用し約 550m に遺構が見られます。東

側の最も広い曲輪を中心とした主郭地区と、西側尾根筋に展開する西尾根地区の二つのまとまりが見られます。

南側で三角形を呈す最大の 25m四方程の曲輪が主郭で、ここから東西に尾根が続いています。主郭の東側には、細長い副郭が接し、切岸南端に主郭から副郭へと土塁が見られます。副郭の東端に円形の高台が見られ櫓台が想定されています。櫓台からは南北それぞれに尾根筋が伸び、北側は後世の削平があるものの、二条の豊堀、長大な堀切と土塁によって、城域を区切っています。南側は、土塁を利用し舟形状の空間を設け、直下に豊堀と土塁を設け通路が見られますが、削平により東側先端部が不明ですが豊堀や堀切の一部が残るため、北側同様堀切で区画されていたと推定されます。

主郭の西側は、二段の曲輪と切岸を介して長方形の曲輪が位置し、最東端に高さ 2 m 程の石垣造りの櫓台が残されています。櫓台の下に、階段状の小曲輪が見られ、南側斜面中腹を利用した通路が、東側櫓台下の虎口へと続いていました。主郭は周囲を石垣で囲み、東西の曲輪は南側のみ 80m 程が石垣造りと考えられます。

西側曲輪群は、石垣造りの櫓台から、約 10m の高低差、直線距離で約 30m 隔てて、多数の小曲輪を隔てて、30m 程の細長い曲輪が 2 段の段差を持って連続しています。西端に豊堀を南北に設け、西側に T 字状に土塁を配しています。さらに下方に長さ 30 メートルの細長い曲輪が見られ、ここから西下尾根筋に沿って小曲輪が連続し、最西端に堀切を設け、城域を設定しています。北側尾根筋には、階段状にいくつかの帶曲輪が残り、最下段西端に二条の豊堀も残されています。本来一連の城であったと思われ、金森氏の入城によって、石垣部分のみが城として再利用され、西尾根地区は捨て置かれたと推定されます。従って、西尾根部分が姉小路氏段階の様子を残していることになります。



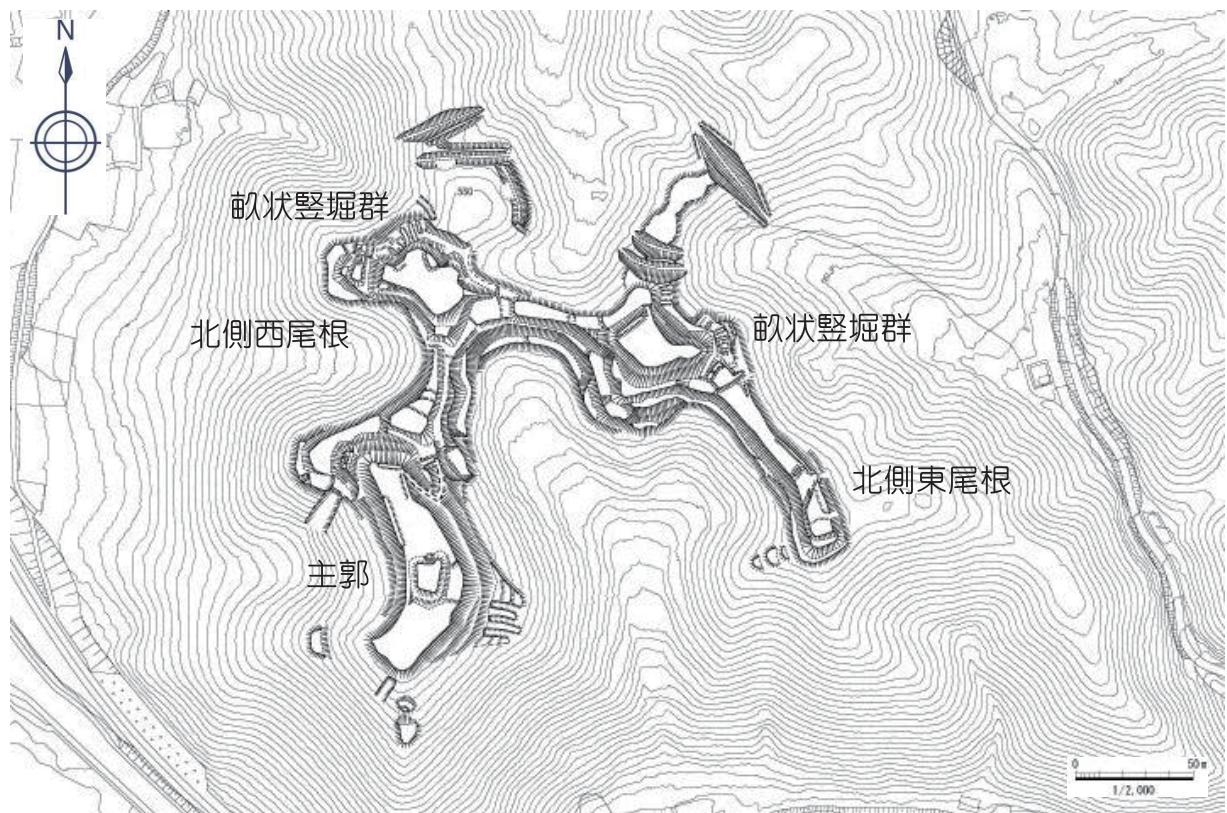
第3図 小島城跡遺構配置図

### (3) 野口城跡

城は、古川盆地北西部の盆地が閉塞する宮川右岸の丘陵山頂に位置しています。山頂部は、3ヶ所の尾根の頂部を利用して、それぞれに城郭遺構が残されています。中でも最も広い平坦地を有する南西部のピーク（標高 559m）が城郭主要部となり、その北側東尾根と北側西尾根にも遺構が見られます。

主要部は、最高所の逆くの字状に屈曲する長さ約 90m × 幅 15~20m の曲輪が主郭で、中央部の方形の高まりで南北に二分されています。北端にのみ土壘が残存します。東側切岸直下に畝状堅堀群（3条の堅堀、2本の土壘）が、南端に1条の堅堀が見られます。北東隅に土壘が開口し、虎口となり北下へと降りていますが、北下帯曲輪の接点に土壘と堅堀を設け、通路を規制しています。この帯曲輪の南西端に堅堀を配しています。帯曲輪から、北に向かい通路状の帯曲輪と削平の甘い階段状の曲輪が伸び、北側東西の曲輪群へと続くことになります。

北側西尾根地区は、不整形の 30×20m 程の曲輪を中心に、西側に堀切、土壘、帯曲輪が見られます。北側は直下に長大な堀切、さらに 30m 程先に土壘を伴う 2 条の大規模な堀切で尾根続きを完全に遮断しています。その東には横堀を配置し、南端を堅堀としています。最も特徴的な遺構は、北側と西側尾根筋の間に設けられた畝状堅堀群（3条の堅堀と4本の土壘で構成）です。北側堀切の堀底道から、東尾根曲輪へ伸びる通路も見られます。

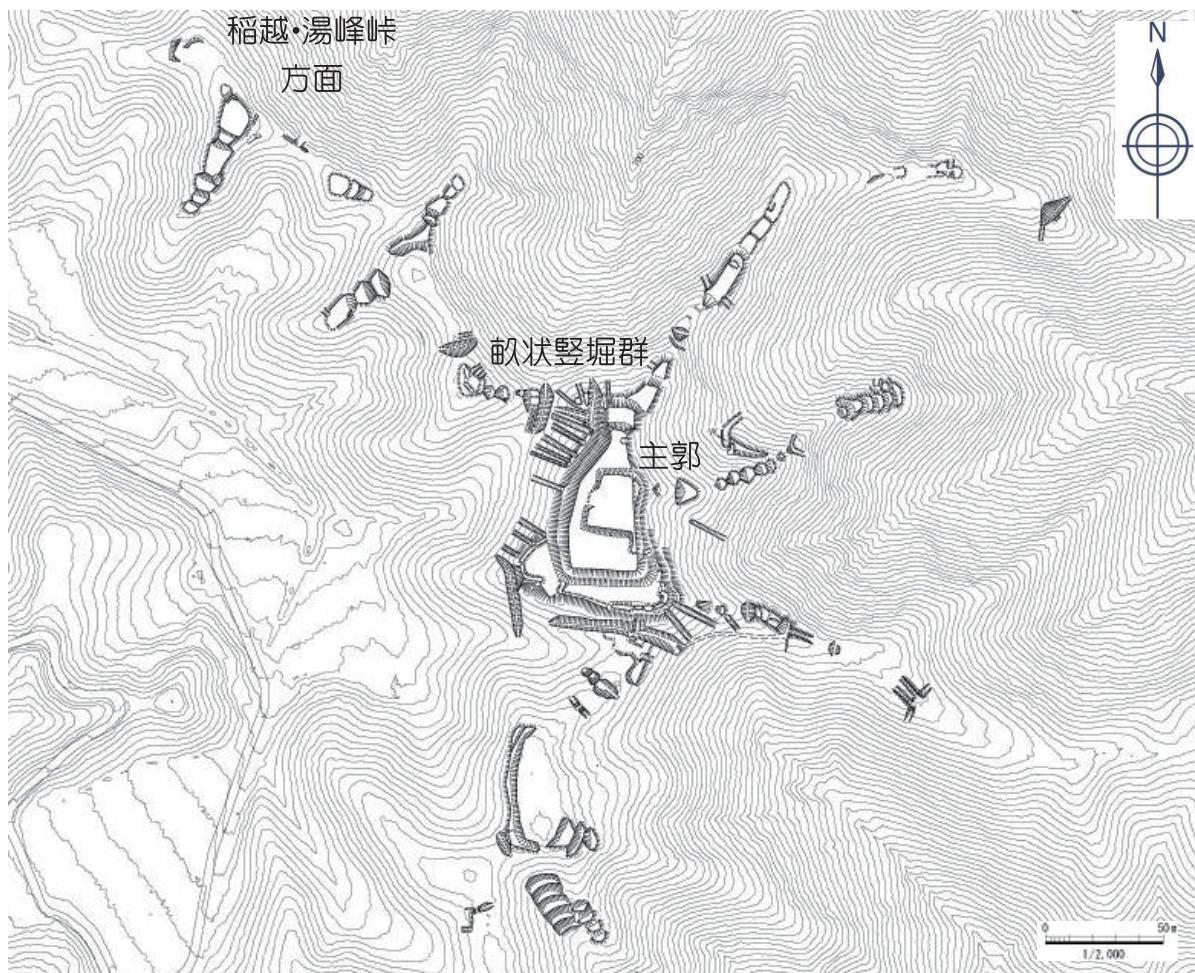


第4図 野口城跡遺構配置図

東尾根地区は、不整形の 20m × 15m 程の曲輪中心に北側及び東側に尾根筋が伸びています。北側尾根筋は極めて厳重な防備で、二重堀切とその先端の土塁を伴う巨大な堀切によって完全に遮断されています。これは、この尾根筋が神岡方面の数河峠へと繋がる道に接続するためと思われます。北東端には、上下端に横堀を伴う畝状堅堀（5 条の堅堀と 5 本の土塁で構成）が設けられています。堅堀群の南側には堀切を設け尾根筋を遮断していますが、その先にも、80m にも渡って長く幅が狭い曲輪が伸びています。

#### (4) 小鷹利城跡

城は、古川盆地の西端に位置し盆地から山間地へ移る山頂部（標高 790m）に位置しています。北側の湯峰峠を監視する役割が推定されます。山頂部の最も広い曲輪が主郭で、そこから派生する 5ヶ所の尾根筋に城郭遺構が残りますが、極めて小規模なもので、主郭を守るために防御的施設と理解されます。



第 5 図 小鷹利城跡遺構配置図

主郭は、南北 30m × 東西 15m 程のほぼ方形の曲輪の東を除く三方に、1 ~ 2 m 程低く、曲輪が取り巻き、両曲輪で主要部を形成していたと思われます。最高所の曲輪

の南東隅に土塁が突出し、通路の可能性も残ります。主要部の南側には5m程低く帶曲輪が見られます。ここには、主要部の南東部から通路が残ります。この曲輪は、高さ約2mの土塁に囲まれています。開口する東端が虎口と思われ、東側尾根筋へと続いています。帶曲輪南側には長大な堀切が尾根筋を遮断、さらに南東部に2条の堅堀を設け、東側尾根筋からの侵入を阻んでいます。帶曲輪の西側には土塁囲みの半円形の曲輪を設け、その西下に長大な堀切を配して、尾根筋を遮断しています。さらに北側に3条の連続する堅堀が見られます。

主要部北側は、3段の階段状の曲輪が見られ、その先に堀切を設け、尾根筋を遮断しています。西側斜面が、最も特徴的で10条の堅堀で構成される敵状堅堀が設かれています。北側の堅堀4条は横堀から派生しています。横堀はそのまま北側斜面に垂直に落ち込み、北側から2本目の堅堀になっています。この堅堀群の最下段には堀切を設け、尾根筋を遮断しています。

主要部の北尾根、北東尾根、東尾根、南尾根、西尾根にもそれぞれ小曲輪や堀切、堅堀などが見られますが、いずれも主要部の防備補完のための施設と思われます。

#### (5) 向小島城跡

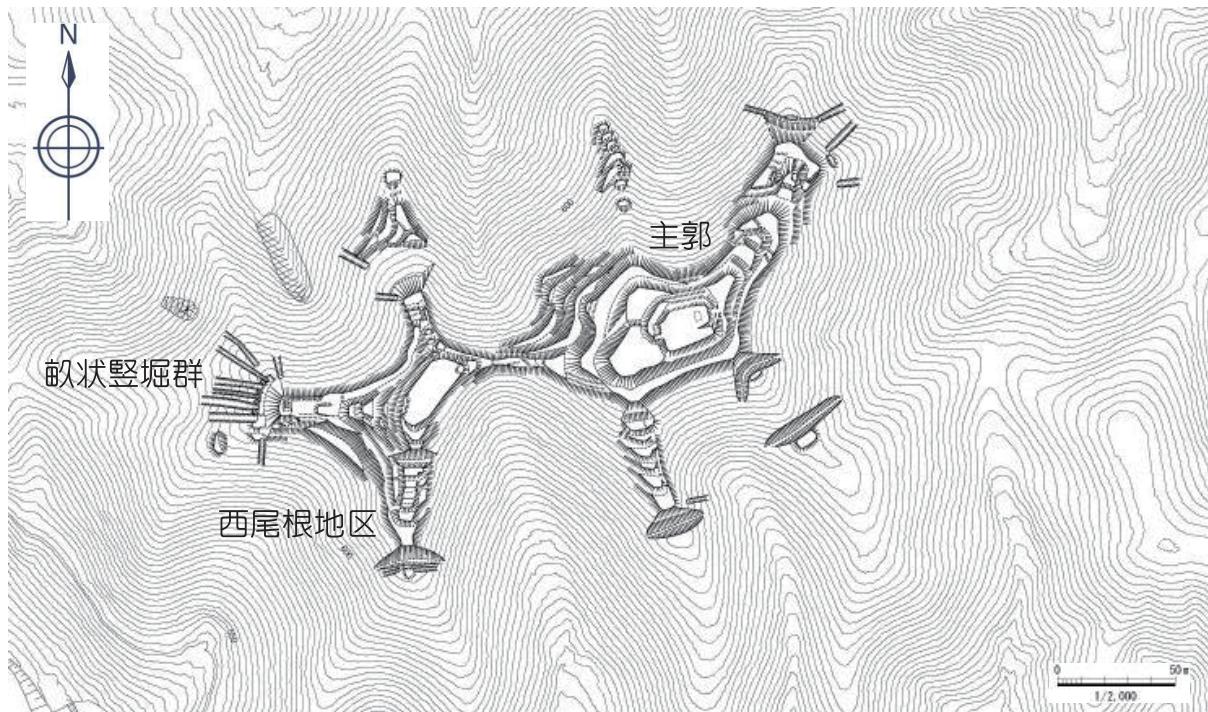
城は、宮川の支流殿川右岸の丘陵山頂部に位置し、向氏の居城と推定されています。白川郷方面の湯峰峠から信包集落へ続く街道を望み、古川盆地の出入りを監視する役目が想定されます。

東側に位置する最高所（標高641m）の20m×15m程の曲輪を中心に、西下南北に一か所ずつの曲輪、南東部下にも一か所の曲輪が付設しています。この主要部を取り巻くように切岸下に帶曲輪が廻ります。北東尾根続きは、階段状に曲輪を配し、両サイドが堅堀となる長大な堀切で遮断し、さらに南側に2条の堅堀を設けています。南東側尾根筋は、帶曲輪の下に土塁を伴う長大な堀切を配置するだけでなく、20m程下にもう1条の堀切を入れ、完全に遮断しています。南側尾根続きは、小曲輪を連続させその下に堀切を入れて遮断していました。

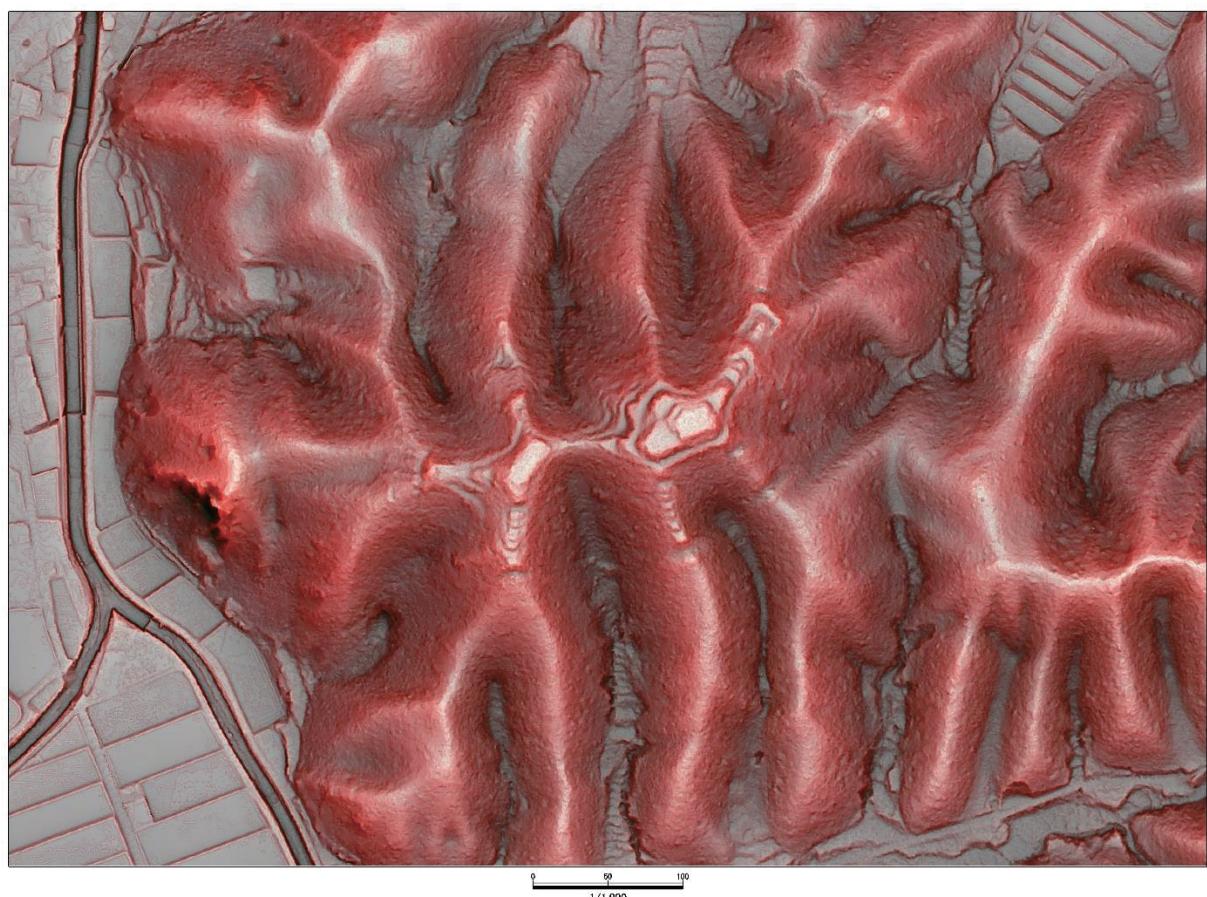
西側尾根は、通路上に西へと伸び、西尾根の中心曲輪（約30m×10m）へと続いています。両曲輪の間を区切る施設は見当たりませんので、両曲輪は東西で相互補完の関係にあったと思われます。北尾根続きは、長大な切岸と西側の堅堀で防御しています。南尾根筋は、小曲輪を介し、堀切を設け、さらに階段状に多くの小曲輪を連続させた後、最下段に土塁を伴う堀切を設け、さらに南に東西に堅堀を配しています。

西側尾根は、小曲輪を連続させ、東側に方形の高まり、北側に土塁を設けた曲輪を配しています。この曲輪の南側に西下の横堀へと続く通路が見られます。この下に敵状堅堀群（5条の堅堀と4本の土塁で構成）を設け、上部に設けられた横堀は南北に

豎堀を設けることで、西側斜面からの攻撃に対し、防備を強固にしていました。さらに、北西下にもう1条の豎堀が見られます。



第6図 向小島城跡遺構配置図



第7図 向小島城跡赤色立体図

#### 4 姉小路氏城館の縄張りから見た特徴

上記のように、古川城跡・小島城跡・野口城跡・小鷹利城跡・向小島城跡の5つの城跡を傍観してみました。年代的には、享徳年間（1452～55）から、金森長近・可重が侵攻し、上記5城を廃城とした天正13～14年（1585～86）までの期間の城の特徴を考えてみることにします。

最高所に中心曲輪を配置し、尾根筋上に曲輪群を展開し、堀切等で遮断するという考え方は、全国的にこの時期の普遍的な様相になります。尾根筋を遮断する堀切については、土壘を伴う堀切がほとんどですが、残土を用いて積み上げ豊土壘状になるのではなく、中央部に積み上げたり、片方に寄ったりするなど防御方向を見据えた配置になっています。この土壘を伴う堀切は、5城いずれの城でも見ることが出来ますので、ある時期の特徴的な遺構として捉えても良いのかもしれません。

野口城跡・小鷹利城跡・向小島城跡の3城に見られる畠状豊堀群は、上端に横堀を設けています。姉小路氏城館の特徴として捉えて良いのかもしれません。また、この3城は、尾根筋を明確に堀切によって遮断しています。小島城跡では、神原峠方面に通じる東尾根に、野口城では、数河峠方面に通じる北尾根に厳重な二重堀切を、小鷹利城では湯峰峠方面に通じる西側尾根に、向小島城では、小鳥峠方面の南側多くの堀切が配されています。これらの城は、いずれも古川盆地の外郭に位置し、古川盆地へと繋がる街道から山城に至る尾根筋を厳重にし、古川盆地への侵入を防ぐことが目的で、曲輪や防御施設を設けたことが推定されます。

主郭部については、曲輪数は少なく、多くの曲輪を付設したり、他の尾根筋と連携して防御したりするというより、櫓台等を設けるだけで、単独で尾根を守備する形を取っていたと考えられます。

石垣が採用された古川城、小島城は、従来の堀切や豊堀は、そのまま残すものの、積極的に防御施設として取り入れた状況ではありません。石垣が採用された時点で、石垣を中心に据えた虎口（枡形虎口）や、石垣によって防御ラインを構築し、対応するように変化したということになります。

※挿図は全て『姉小路氏城館跡－総括報告書－』2022 飛騨市教育委員会より

## 姉小路氏城館跡とその周辺の空間構造

山村亜希（京都大学）

### 1 姉小路氏の城館とその周辺

#### （1）城館の特徴（飛騨市教委 2022）

- ・主郭が一段高く、眺望に優れる
- ・古川盆地の外縁部に厳重な防御施設を持つ城郭が立地。古川盆地への侵入を防ぐ
- ・古川城・小島城・小鷹利城に舟形虎口。古川城と小島城には主郭と虎口に石垣を配置
- ・山城の山上で居住を伴う利用を想定可能（小鷹利城・野口城の発掘成果）

#### （2）城館周辺の特徴（大下 2021、飛騨市教委 2022）

- ・16世紀初頭まで：在地国人領主（姉小路氏・江馬氏）の城館と拠点空間

古代寺院・古墳・中世集落の立地する地域に近接：居住に有利な高燥地（段丘・自然堤防）

山城と拠点集落は近接せず、やや距離を隔てる。山城周辺に諸施設を集中させず

既存の寺社・街道・集落に大きな変更を加えず、地域の中心的な場を拠点として利用

- ・16世紀後期：戦国領主（三木氏・江馬氏）による拠点空間の改変

拠点・集落・寺社の要素を一体的に配置した可能性。街道や河川に近い地域を利用。

- ・天正15（1587）年～：豊臣大名・金森氏の城下町建設

河川が合流する低湿地に城下町を配置、武家地と町人地の区分明瞭

町人地はヨコ町型の長方形街区、街道の引き込み

■戦国期の在地領主の城館は、地域社会の拠点的な場と空間的に分離する傾向があったが、16世紀後期になると城館（山城）の周囲に諸施設を集約する「城下」の萌芽がみられる。その状況は豊臣大名・金森氏の入部によって一変し、河川合流点の低湿地に新たに拠点城郭と城下町が建設される。

【本報告】地域の地理空間の中で、在地領主の城館とその周辺の空間的特徴を検討する

### 2 地形図から読む地形と城館の立地

#### （1）飛騨の地形と街道

- ・飛騨の地形と河川：越中へ向かう神通川（宮川・高原川）・庄川と美濃へ向かう飛騨川。本川とそれらに合流する中小河川が複数の深い谷筋を形成。東に3000m級の山々が連なる飛騨山脈。
- ・寛文十年巡査使図絵図：街道は、基本的に谷筋を伝って源流まで進み、峠を越えて別の谷筋と結ぶ  
河川の作る谷筋が交通路として機能

庄川・小鳥川・宮川・高原川の「タテ」の谷筋の街道とそれらを結ぶ「ヨコ」の谷の短絡路

美濃・長良川の谷筋と結ぶ峠道

- ・飛騨の歴史環境：16世紀半ばまで国人領主が各谷筋に割拠・抗争→16世紀後半：戦国大名（上杉氏・武田氏）の通行・進出→天正期：豊臣大名の侵攻と支配

⇒戦国後期まで国人領主が併存、戦国大名の支配領域の空隙。豊臣期に急速に統一政権の支配下に

#### （2）古川盆地の地形と城館（図①・②）

- ・城館は谷と谷の交点、支谷の出入口に立地=道の結節点に近接、遠望に優れた山頂  
→飛騨の谷地形に規定された通路の掌握に適する立地を優先。古川盆地という領域の境界を意識する山城
- ・古川城が例外的。複数の谷が交差し宮川と荒城川という大河川が合流する氾濫原に近い：性格が異なる？
- ・南西から北東に走る直線の断層谷が古川盆地を横断し、大きな谷と谷を結ぶ短絡路が存在
- ・古川郷の宮川右岸平野の水田は、荒城川から取水した用水で灌漑。荒城川の水かかりの最下流は杉崎の太江川付近まで→荒城川の水流の影響が強く、沖町、現古川市街地に低湿地が形成

- ・山際の地形に沿う用水や道：安定・合理的（古い）／平野の中央を直線で通る街道：人為的（新：近世）
- ・古代・中世の寺社は盆地の山際の段丘や扇状地に立地する傾向がある

### 3 姉小路氏の城館とその周辺の空間構造

#### (1) 古川城（図③）

- ・荒城川から複数の旧河道の痕跡。広範囲に残る条里地割→荒城川から取水する用水の水掛かり域に条里地割が明瞭に残存。方格地割内には宅地が少なく集落も小さい：古代・中世の水田の開発地割
- ・東側は南東一北西の斜行地割が条里よりも目立つ。一段高い段丘面か（畠も混在）。上町に大きな村落⇒古川城の立地：古川郷の中で低湿地を回避し、旧来の水田開発地と村落を膝下に臨む。平野の地理を意識
- ・旧街道の可能性：①古川城の山麓／②宮川南岸から分岐・渡河し上町を通過する越中街道／③荒城川南岸⇒②と③は異なる谷からの道：交点が是重村付近。貴船社から増島城下に向かう斜行街道の原型？
- ・永禄・天文年中に上町（正覚寺）や下町（真宗寺・本光寺）に寺社が移転・創建
- ・古川城と宮川を挟んで対峙する位置に「古町」：河原に近い低地に短い直線道と短冊形地割
- ・三木氏、城郭東麓・南麓に武家屋敷群を集約するとともに、対岸に古町の建設（飛騨市教委 2022）  
⇒山城と旧集落・旧街道との間の空隙を埋める「城下町」建設。「古橋」で結ばれた在地から見られる城へ

#### (2) 小島城（図④）

- ・宮川と太江川の合流点。古川盆地と高原郷へ延びるV字谷（断層谷）の交点。太江川右岸に段丘・扇状地
- ・宮谷寺が扇頂付近に立地し、扇状地を形成する小河川沿いの道に門前集落。小島城とV字谷を挟んで対置
- ・旧街道：V字谷の中腹の段丘上を走る道／太江川に沿って谷底を通る道
- ・淨慶寺東の字「細江」に太江川からの用水取水口。段丘の縁で方形街区の集落の背後を通って杉崎の水田へ  
⇒旧来の村落の水利空間に影響を与えない太江川下流部に、人為的な方形街区を創出

16世紀初頭の西光寺と本龍寺が方形街区の境界を明示する指標

- 太江川沿いの旧道から人工的に直線道を延伸させ、両側に方形街区（直線道との交点にずれ発生）を施工
- ・荒城川水系の氾濫原末端（沖町・沼町）に、金森氏によって数詞地名を冠した方形街区の「城下町」建設  
⇒杉崎集落の方形街区以上に完成度の高い計画地割で在地の地理空間と乖離。旧来の村落との関係乏しい

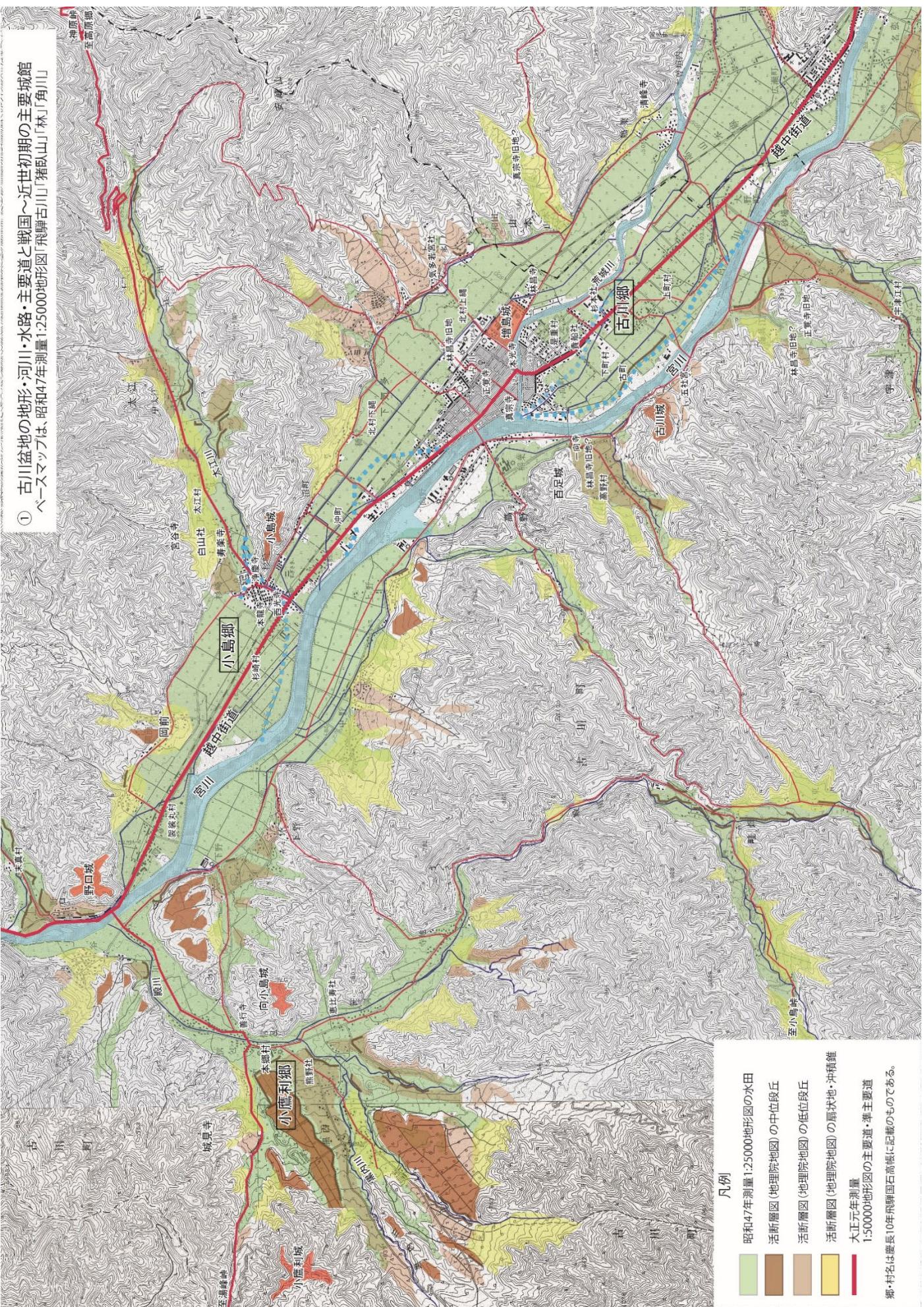
#### (3) 向小島城・小鷹利城（図⑤・⑥）

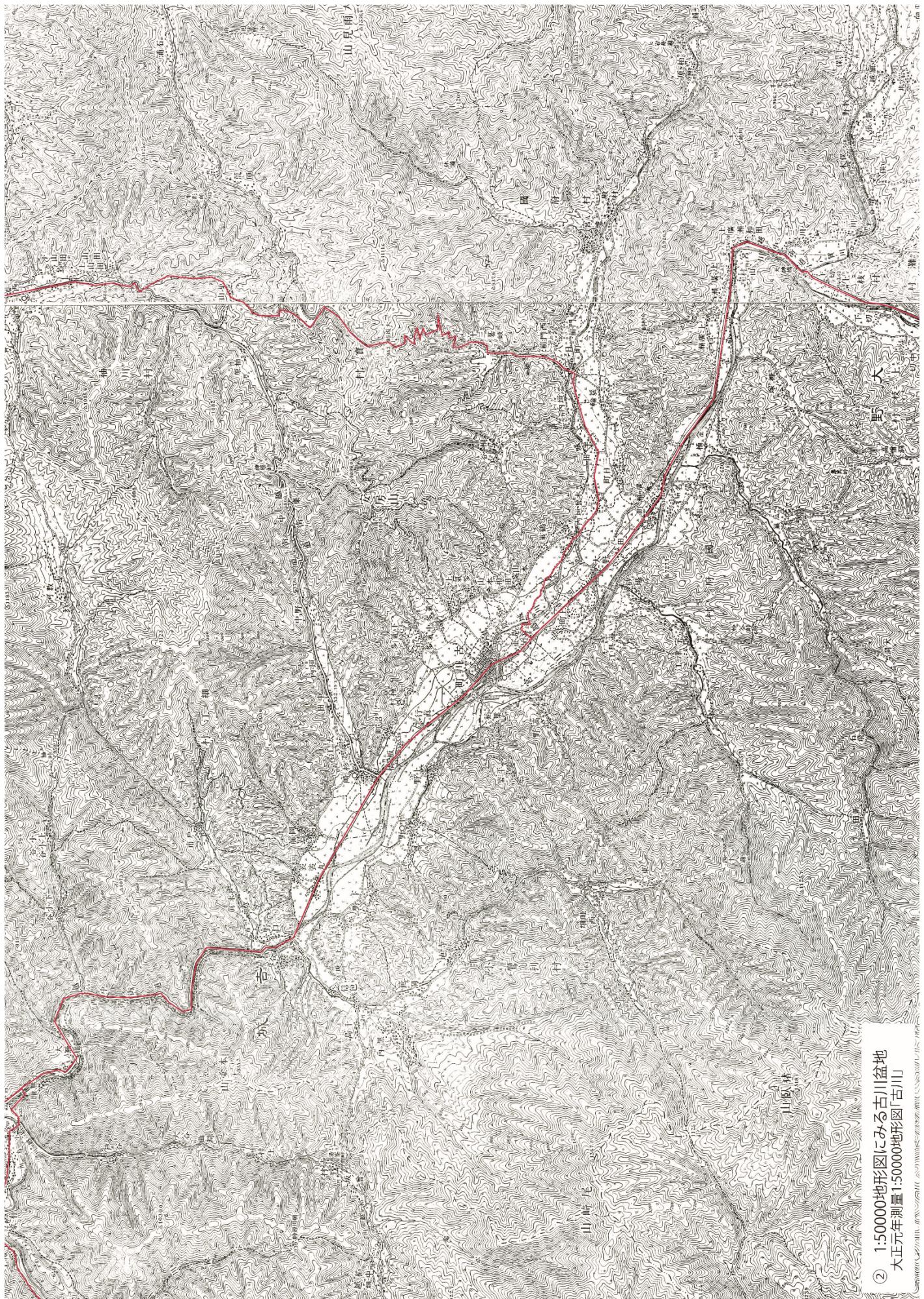
- ・古川盆地から奥に入った小盆地。殿川と支川が谷の入口で合流。段丘・扇状地を小河川が下刻
- ⇒独立性が高い盆地ではあるが、水田開発可能な土地は限定され、少ない。一方で通路としての性格も持つ
- ・集落は盆地の入口（交通の掌握）／扇状地・低位段丘上（開発村落）⇒盆地の2つの性格に呼応
- ・小鷹利城と向小島城も両方の盆地の性格に対応。両者を結合する中位段丘の直線道（推定登城路）

### 4 金森氏の城下町建設（図⑦・⑧）

- ・河川の合流点＝複数の異なる方面に向かう街道の交点に立地。低湿地で旧来の耕作領域への影響が少ない  
⇒街区・町・武家地の計画的配置が容易。近隣村落を潤す用水を城下町の都市計画にも利用（背戸川）
- ・数詞地名への強いこだわり（越前大野→飛騨小島・高山・増島→美濃上有知）は極めて特徴的
- ⇒商人の在地性・同業者組織・序列の明示の否定／単なる住所表示機能のみ付与／在地との妥協を忌避
- 豊臣系城下町の中でも、在地から遊離した「モデル」のような城下町の実現度が高い  
←金森氏独自の商業・流通振興策+飛騨の旧来の地理空間の要所を回避して城下町建設用地を確保

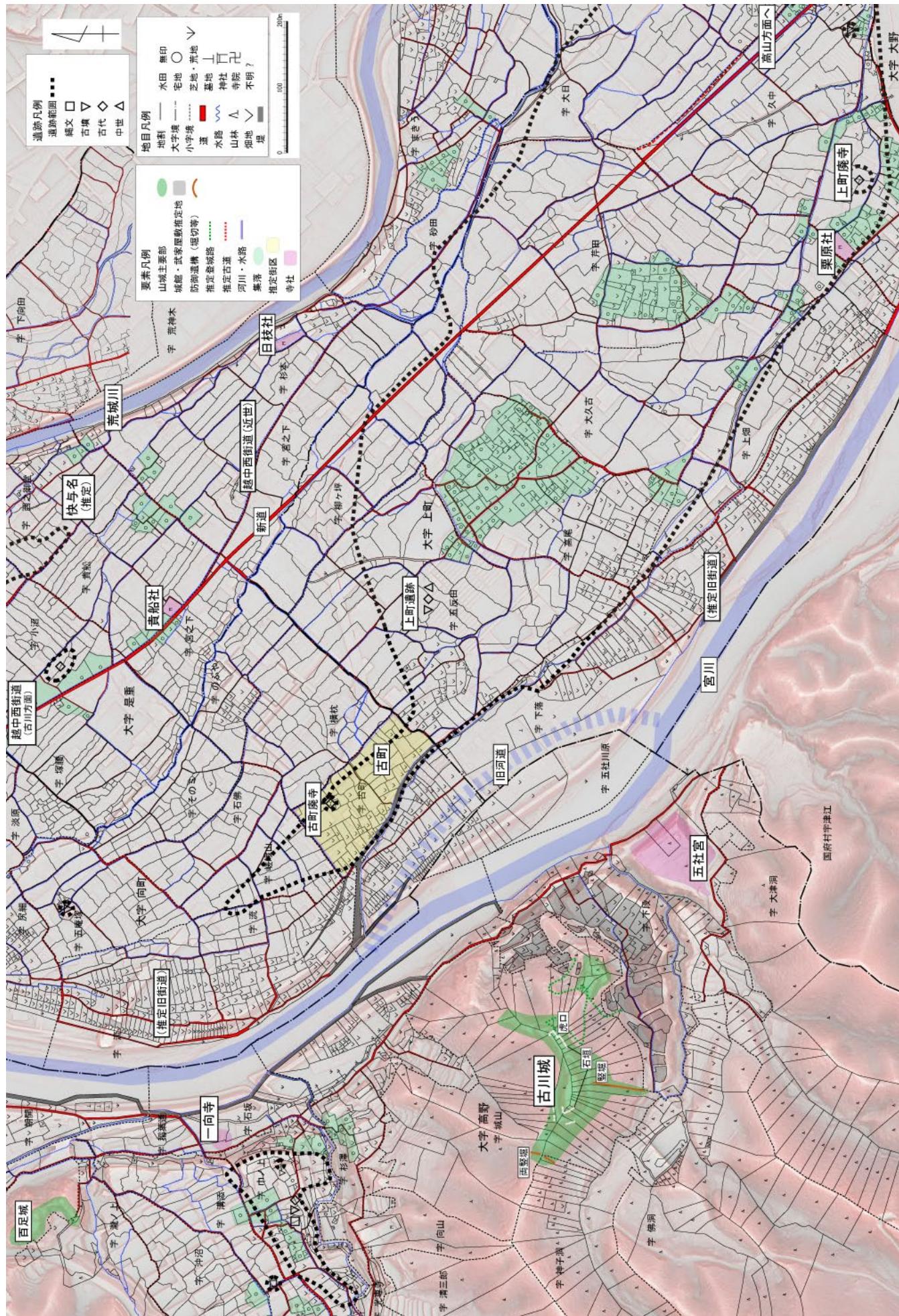
【参考文献】大下永「飛騨北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷」（仁木宏編著『戦国・織豊期の地域社会と城下町—東国編一』戎光祥出版、2021）、大下永「飛騨における武家拠点の変遷と小島・東町城下町の構造」（中井均先生退職記念論集刊行会編『城郭研究と考古学』サンライズ出版、2021）、飛騨市教委編『姉小路氏城館跡－総括報告書－』2022



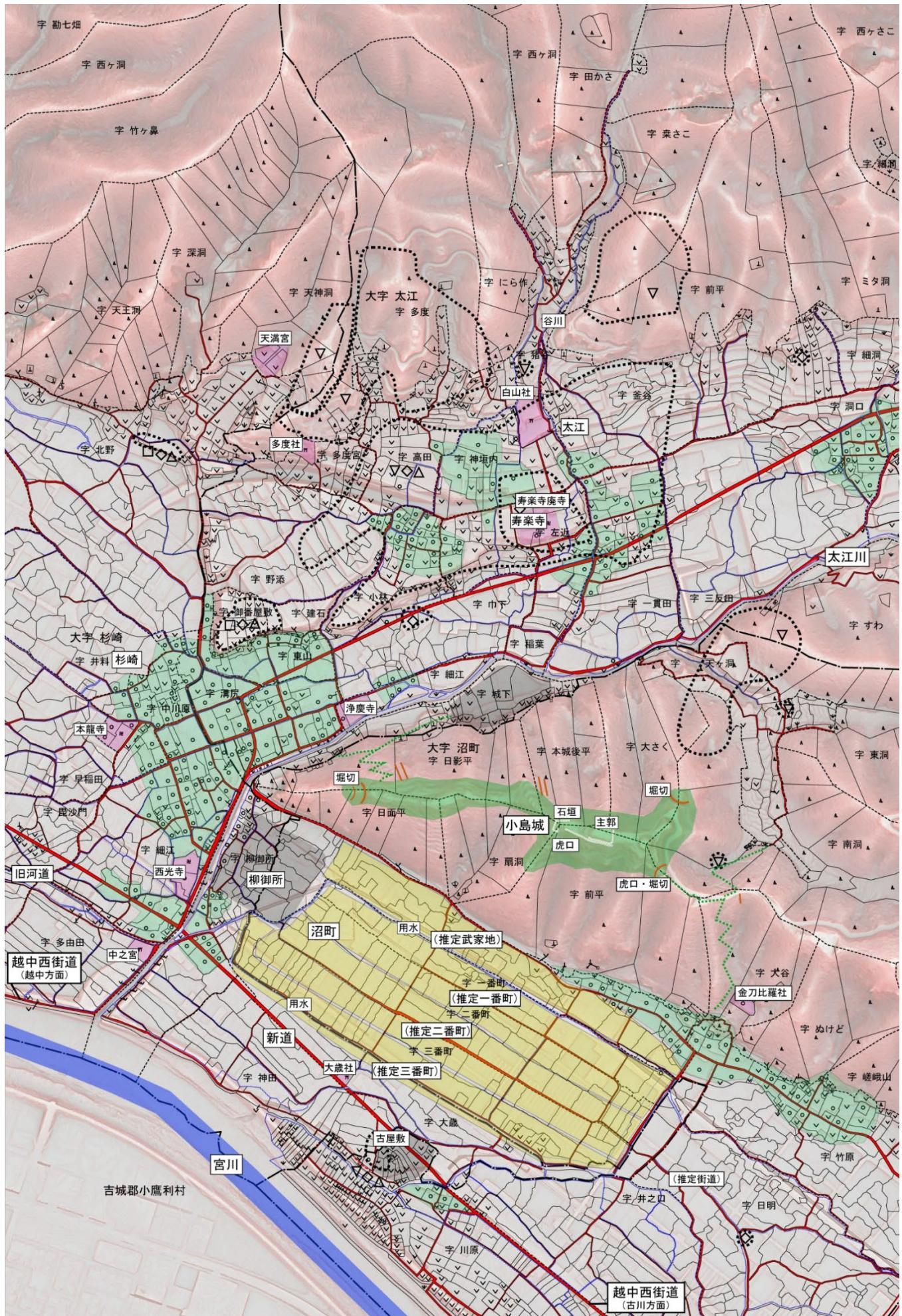


② 1:50000地形図にみる古川盆地  
大正元年測量1:50000地形図古川

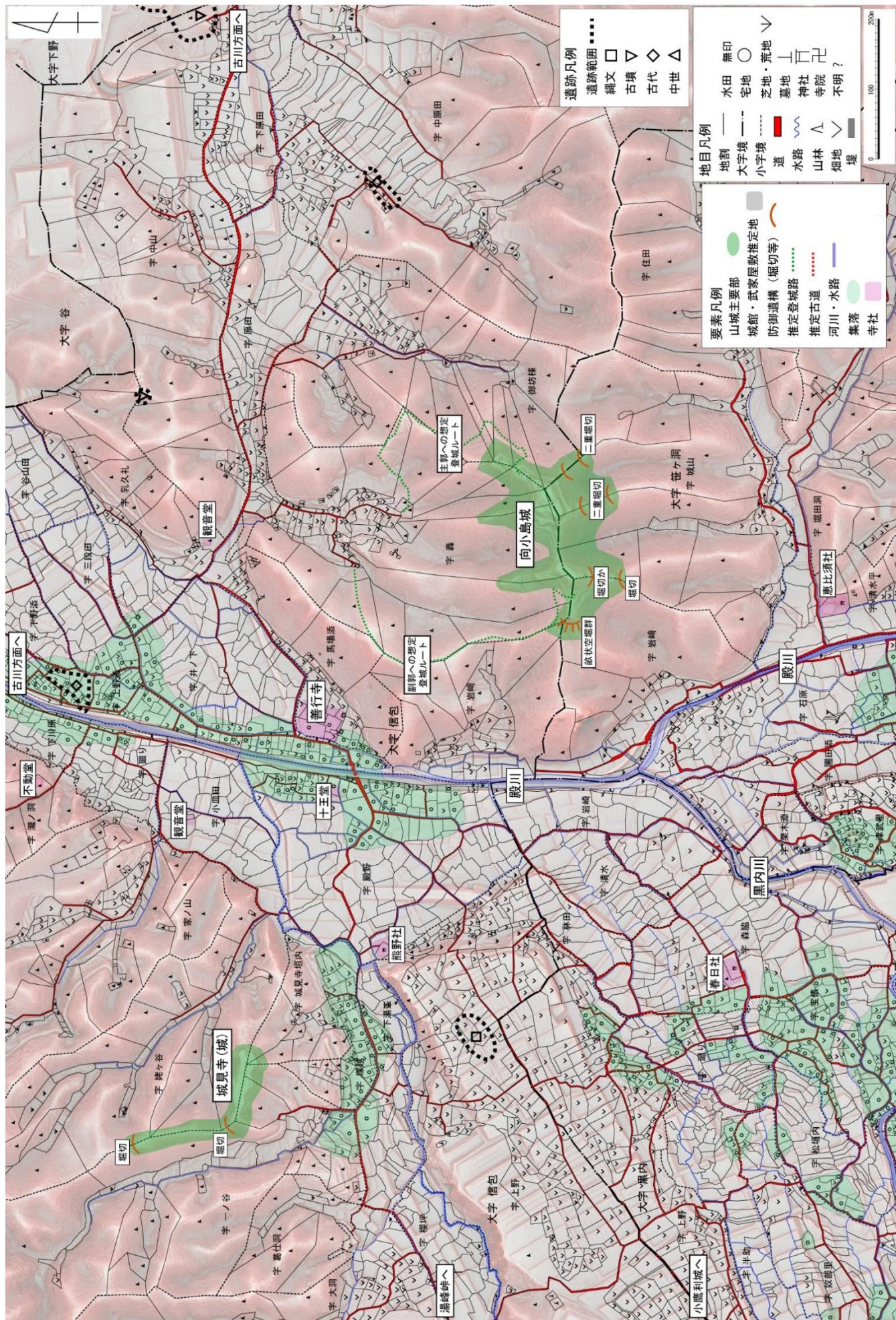
③ 古川城周辺景観復原図（飛驒市教委 2022）



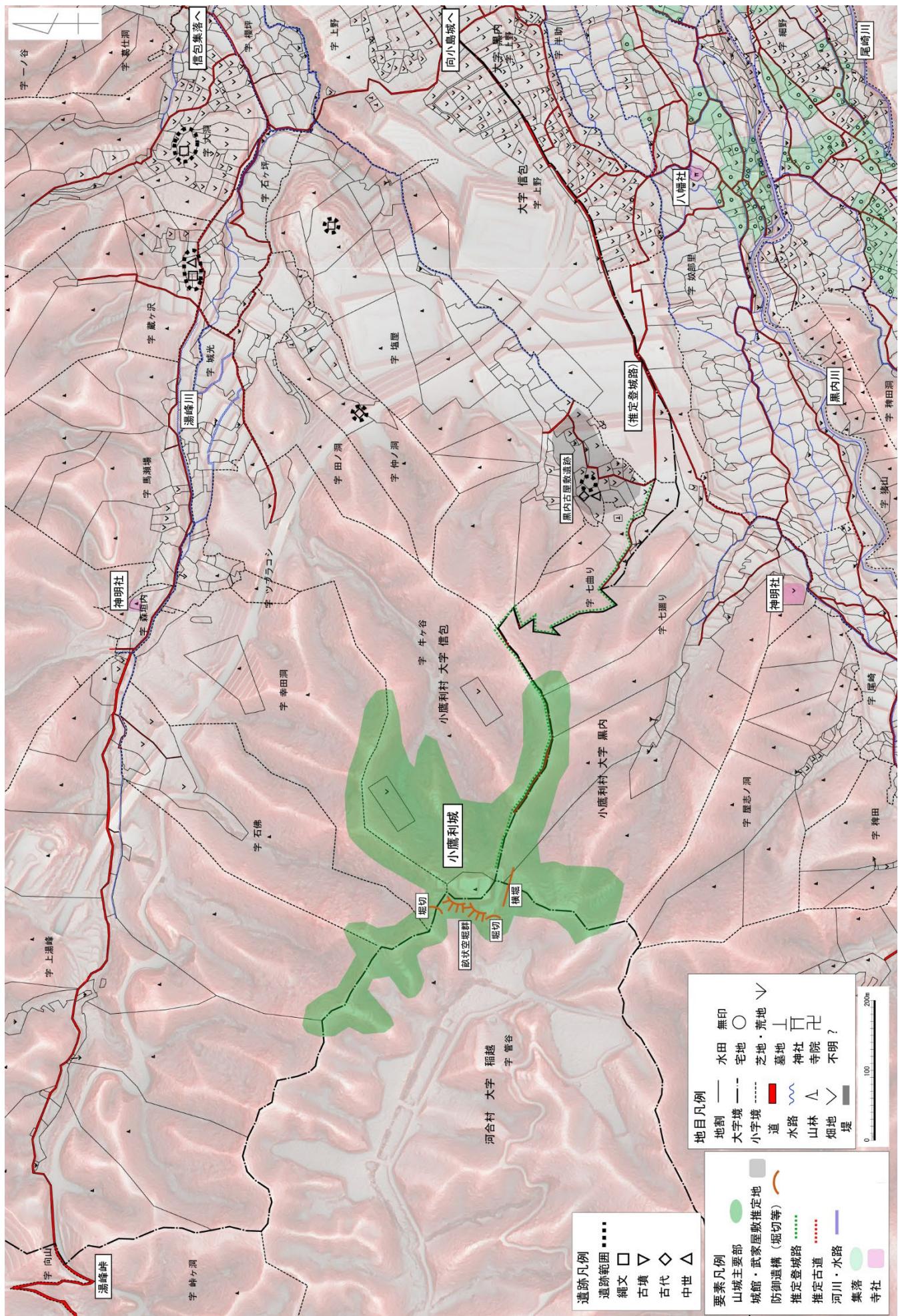
④ 小島城周辺景観復原図（飛驒市教委 2022）



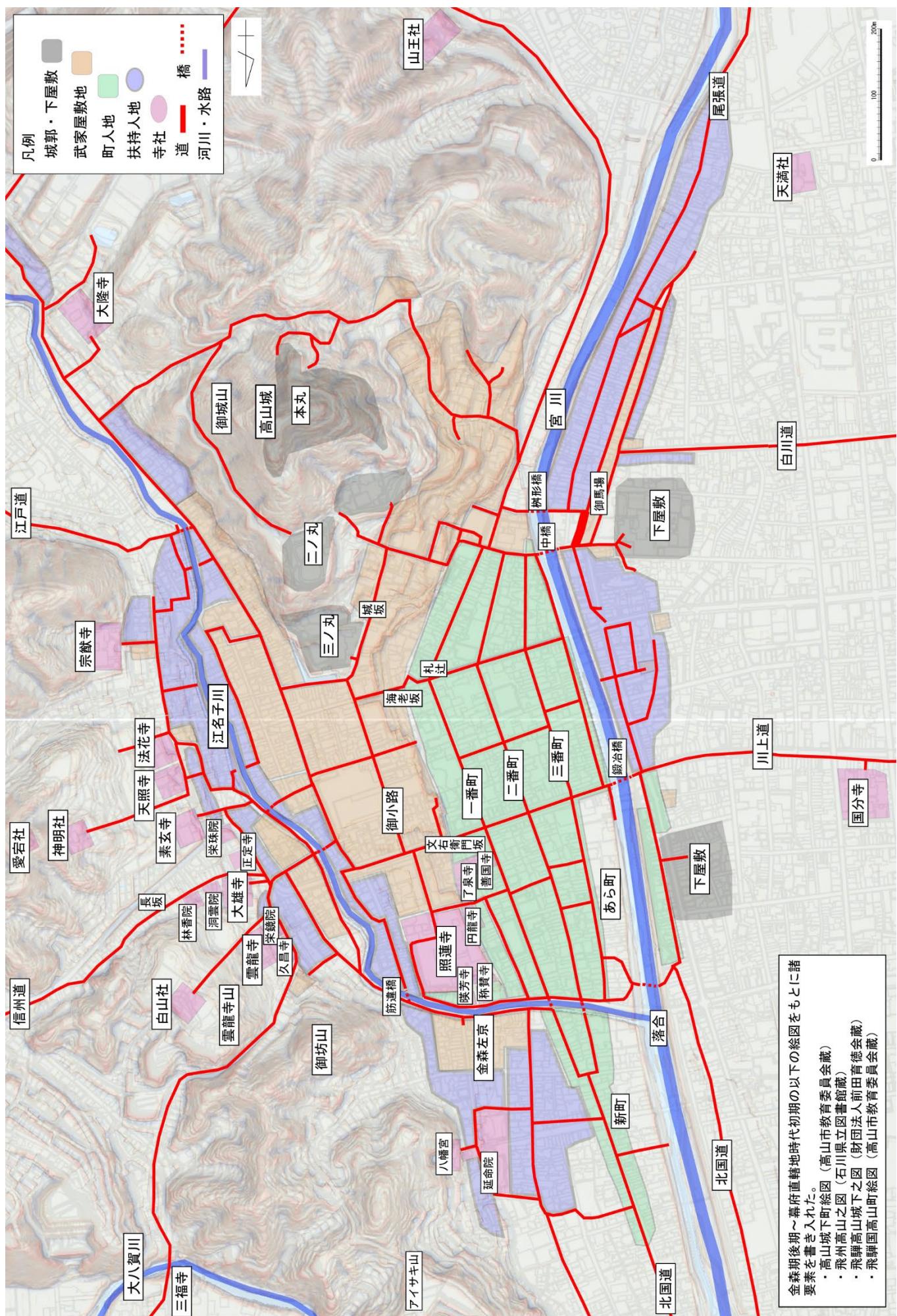
⑤ 向小島城周辺景観復原図（飛驒市教委 2022）



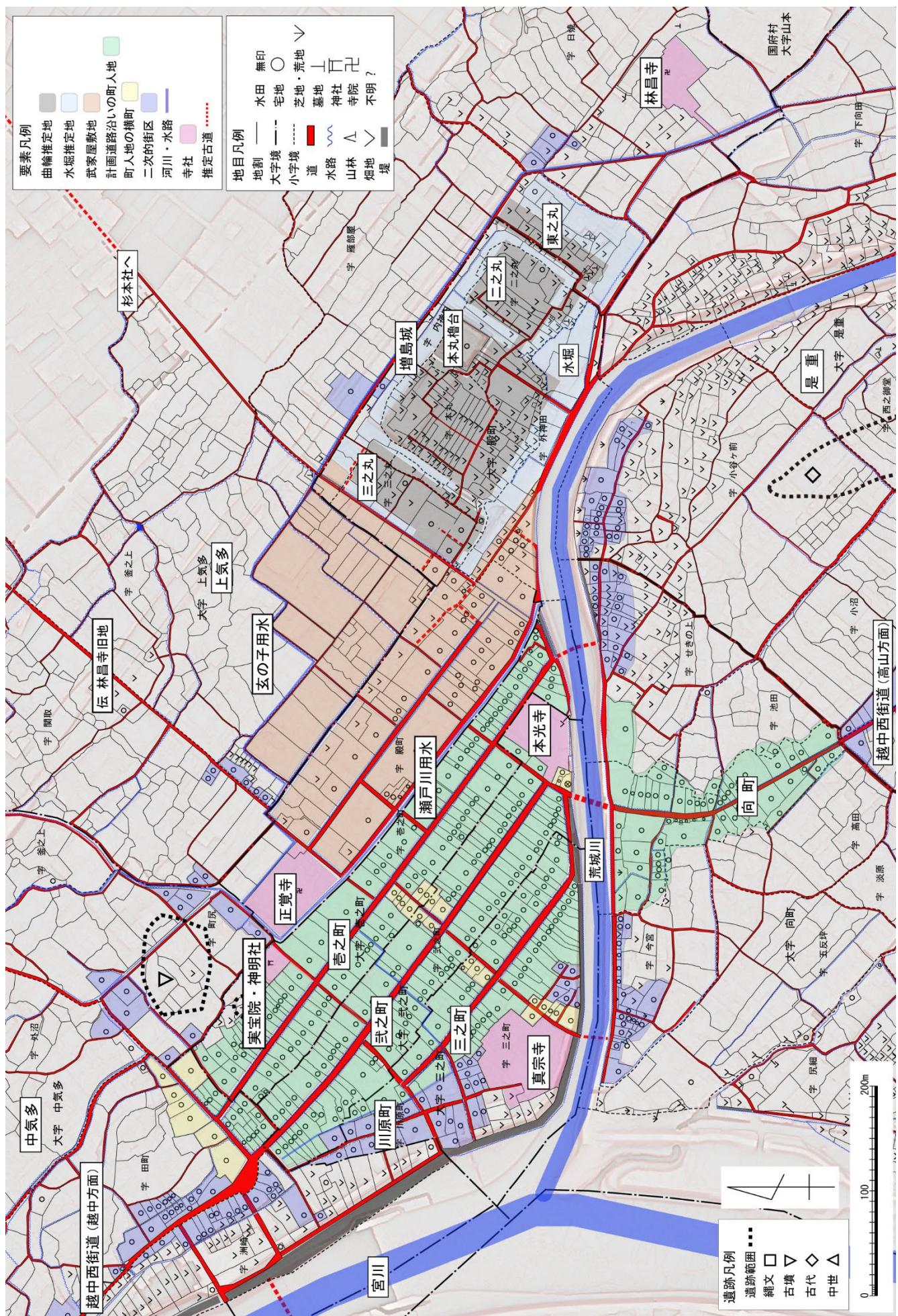
## ⑥ 小鷹利城周辺景観復原図（飛騨市教委 2022）



#### ⑦ 高山城下町景観復原図（飛騨市教委 2022）



⑧ 増島城下町景観復原図（飛驒市 2022）



飛騨市山城シンポジウム

## 姉小路氏城館跡の実像に迫る

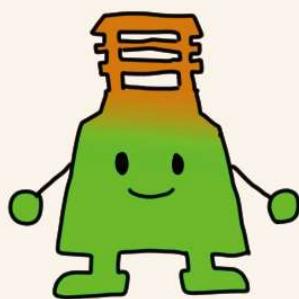
### 発表要旨

発行日：2023年10月29日

編集・発行：飛騨市教育委員会

岐阜県飛騨市古川町本町2番22号 TEL：0577-73-7496

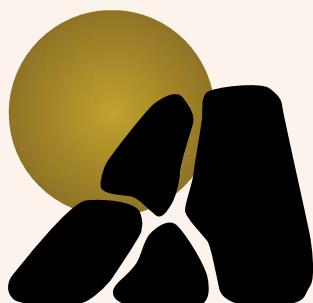
印 刷：オフィスぽんぼり



山城くん



おやかたちゃん



飛驥の城跡

Castle Ruins in Hida

飛驥市の文化財  
ホームページ：  
<http://hida-bunka.jp>

